
ダイバー 第二部 青年の“あいとゆうきのおとぎばなし”

るー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ダイバー 第二部 青年の“あいとゆうきのおとぎばなし”

【Nコード】

N8754R

【作者名】

るー

【あらすじ】

青年の旅路は——続く

“幸せな結末”を迎える為に——

..ご注意!

前作が世間一般的にはアンチ作品と呼ばれています

原作キャラなどが話の構成上、理不尽に死亡したりするのがあるお話しになりますので、そういうのが無理な人は読まない事を強くお勧めします

気分を害されても当方は責任を持ちません。あしからずご了承を

折れた翼、砕けた爪

見上げる空に……オーロラが輝く土地

極寒の地——アラスカ

「るへ~~~~~ん!!!!!!」

小さな身体をちぢ込ませながら

長い銀髪を白い風にたなびかせながら

吐き出す白い息で震える小さな掌を暖めながら

銀髪の妖精は——懸命にその細い足を前へと

雪が降り積もった大地を蹴り出して…進む

大切な人を探し出す為に

己の持つ力によって導かれながら——

「イーニア?!?! 待って!! イーニアアアア!!!!」

その小さな妖精を守る。姫騎士たる少女——クリスカが前に行く
イーニアを引き止めんと声を荒げるも

「やあ!!!! るへんが! るへんが——」

イーニアはクリスカの静止に声を荒げて、前を進む

しかし——イーニアとクリスカでは体格差が顕著であり、また体力の差でも圧倒的に差がある為に

「どうしたの?! いきなり…ゼロ少佐を呼びながら駆け出すなんて?!」

ラトロワの元へと顔を出しに行く最中に

突如、弾かれたかのようにイーニアの身体が跳ねると…一目散に外へと駆け出したイーニアへとクリスカが再度問うと

「るへんがいるの!!!! このちかくにたおれているの!!!!」

手足をバタつかせて、クリスカの拘束から逃れようともがく

いともあっさりと成功した。それは——クリスカも——

「ゼロ少佐が……倒れている…?!」

洩らした呟きに呼応するかのように、さらに後方からやって来る

「シェスチナ! ビャーチェノワ!」

ラトロワの二人を呼ぶ声。それにイーニアは耳を貸さずに駆け出す
クリスカは…ラトロワでも見たことのないような動揺した姿を晒し
ながら

「しょ…少佐……」

戦慄く唇

「どうしたというのだ?! シェスチナは静止しないし……お前も――」

「イーニアが……イーニアがゼロ少佐を捉えたと――」

「なっ?! ……くっ」

そんなクリスカから齎された言葉に――ラトロワは駆け出す

イーニアが向かった先へと

「シェスチナ!!!!!! 何処にいる?! しえすちなあああっああっ
ああっあ!!!!!!」

張り叫ぶ。声が木霊するかのごとくに

そうして――

「るへん!!!! おきてよ!!!! るへん!!!!!!」

視界に入る。懸命に雪に塗れた身体を揺するイーニアと

「祐樹……………!!!」

雪の上に零す……老人のような、一切の輝きのない……くたびれたような乳白色の髪

仮面を無くし、大量の血に濡れた——“真っ白い”ゼロスーツとマントを纏った青年が倒れ伏している姿を

時は——

英雄^{ゼロ}が死んだ日より……約一ヶ月後の

2001年 12月16日

くしくも——冥夜と悠陽と……白銀武が生まれた日

始まる——

——ユヘン？ルヘン？……ユウキですか？……うん、ユウキ。良き名ですね

黄金の夜明けのような笑みをくれる……金の絹糸のような髪を両サ

イドから垂れ、後頭部はシニョンとリボンで纏めた女性

龍の血を継ぐ……気高き騎士

——お母さんを“集めてる”の

無邪気な笑顔。もはや、どこかしら壊れてしまっているのかもしれない……

首から下げる……焼け焦げ、振れた男の指に合わせられたエンゲージリングを鎖に通して

その少女は焼け野原から探す……ポトフ鍋に入れられた兄弟達の遺骨に母を会わせる為に

——幾度、世界を越えるのか……

並行世界を彷徨い続ける宿命を持つ男は

愛機^{ぼうれい}を駆って舞う。見定める為に

——今度こそ、確実に！貴様を……送る！！あの世という奴にな！

蒼き拳闘士を駆る

己の世界と決別したあの時と同じように

相対する者へと構える

——噛み砕け…

壊された弧狼

——君にとって、僕と言う存在は“迷い”を表すようだね…

暗闇の“海”を照らし出す為に持つランプが…

癖っ気の強い茶髪。童顔の裏切りの騎士を浮かび上がらせる

——救えるか？お前に…成しえるか？奇跡を！

それはかつての己が纏った姿。心の映し身

「ここは……？」

真っ白なシーツが敷かれた簡易ベッドの上から身を起こす

「“僕”は……？」

始まる

もはや、誰にも分からない時代の中で

始まる

青年の物語が、何色にも染まらない……真っ白な色合いで

二度目にして真の旅路が

アルカナの旅路を——自分自身で歩き出す

新世界（前書き）

お久しぶりです。

とりあえず、お読みになる前に：

前作に挿入話と最終話の裏側の話とアフター話が追加されていますので確認していないと噛み合わない部分があるので…ご確認を

新世界

―2001年 11月11日 カシユガルハイヴ

言葉にならない慟哭がデータリンクに満ちる

たとえば、かつて“ウオードッグ狂犬”と呼ばれた選りすぐりの衛士であれども……

その腕は我武者羅に振られる

鋼鉄の巨人を自在に動かす意思を伝える装置――操縦桿を、二対のスティックを暴れるように縦横無尽に

その足は我武者羅に叩きつけられる

鋼鉄の巨人に積まれた火を吐く翼を操る装置――フットペダルを、アクセルとブレーキの役目も果たす二対の鉄板を踏み抜けと言わんばかりに

部隊内、最年長の女性と言えども――枯れんばかりに吼えたける

男の名を、愚者を――――イングラム・プリスケンTIME DIVERからクヴオレANOTHE
ゴードンR TIME DIVER

そして……LAST DIVER。ユヘンにしてルヘン・バルシエムへと

「あっああっあっあ……！！！！なぜ？！どうして？！動いて！お願い！！！」

まりもの叫びも

「動きなさいよ！！動け！！動いてよ！！」

亦菲の叫びも

「動いて……動いて！！」

栲子の叫びも

「貴方には……！！聞きたい事が……！！」

みちるの叫びも

「返事……聞かせてもらってないよ……！！」

晴子の叫びも

戦乙女達の叫びを……

その腹に収めた自らの主人に背いてでも鉄の巨人達は――

呼び出した者の遺志を頑なに守り続ける

モニュメントの柱を駆け抜けて行く。亡霊の血を継ぐ鋼鉄の巨人達

飛び出した。青空が眩しいぐらいに澄んだ空の下へと

白亜の戦艦の元へと導かれていく。ナデシコフリートサポート艦級、ユーチャリスの元へ

閃光と轟音が天へと昇った

データ・リンク越しに周辺の国連軍並びにアメリカ軍の混乱が把握できるも――

「あ……ああ……あああつあああ！！！！！！」

ユーチャリスの艦橋に座するサラには、どうでもいいことで

目前のモニターに映し出される現実。閃光が迸り、天空へと駆け抜けて行く

有様を——共に映し出される戦域マップに表示されていた祐樹の
マーカーが同時に消失した物を

呆然と、認識できないままに……村上ゆかりは見据える。一切の色合いが失せた瞳で

慟哭と悲鳴が奏でる悲しみ。それすら……安寧に受け止められるような状況ではなく

戦乙女たちの機体がユーチャリスの直衛配置へと“ESC”の命令によって決められた位置へと辿り着いた時

彼女達の目前には——“不知火・零型”と“シュロウガ”の二機が対面に位置する場所へと……在った

“不知火・零型”は武装も何も構えることなく、歓喜に満ちた雰囲気を持ち

“シュロウガ”は悠然と立ち尽くす。“不知火・零型”の斜め後方にて

データリンクに戦乙女達以外のモニターが映し出される

白銀はくぎんの英雄。真なる時間軸であれば——まさしく世界に一石を投じた大英雄であるが

「……白銀え……!!」

歯軋りが一つ。ユーチャリス艦橋から繋いでいるサラが洩らした音

憎悪に満ちた眼差しと伶俐な面を憤怒に歪めた表情のままに

そうして……白銀はくぎんが言葉を紡ごうとした刹那——

「お役目御免だよ」

歪んだ口元。嘲りに満ちた表情——道化師が要らなくなった人形捨ててるままに

“シュロウガ”は“不知火・零型”のコクピットを

「泥人形」
しろがねたける

刺し貫く。魔王剣デイスキャリバー——酷く変質してしまった……デイスカッターで

貫いたボディ部から斬り上げて袈裟斬りに振り下ろす

強化した装甲であろうとも……佐渡島の時の様な紛い物でない“シュロウガ”の一撃は

戦術機の装甲など紙切れに等しく——あっけなく……両断され、蹴り崩された

「刈り取らせてもらったよ……妬み」

恍惚とした表情のままに呟く声音は……

「み、味方を……殺した……?!」

戦慄と理解できないと言う感情がもたらさ恐怖で、ほんの少し声音が震えながらに千鶴は呻く

彼女の言葉が……この場に居る者達の代弁であろう。多かれ少なかれ……同じような表情で

墜ちいく“不知火・零型”を見やる

バラバラにパーツが弾け飛び……辛うじてコクピットブロック部分を残した胴体を

”Sterbenfalken”——死を運ぶ隼と、“この世界”では認識されたフォルムを持つ戦闘機

「な?!」

「あれは……横浜基地を襲撃した?!?!」

水月が呻き、美冴が言葉にする

かつて……自分達をたった一機で完全に無力化した戦闘機から人型機動兵器へと可変する機体

だが——

そのフォルムはかつて見た姿とは異なり

”Sterbenfalken”——ビルトラプターの後進翼とは違い、前進翼

前方部に二機のブレードに見立てられ、PTへの変形時には後部ユニットへと位置を変えるテスラ・ドライブを搭載され

原型機には無かった…本体内蔵型の火器。レール・キャノンや格闘兵装、ブレード・サイを搭載した機体

「また…僕の邪魔をするのかい？」

悠然とした態度は変わらず、何処か懐かしさを齎す声音でゆっくりと言葉を紡ぐ

「羊羽」
ひつじのはね

アサキム・ドゥインは、最早どうでもいい存在

——平行世界軸。因果粒子論に法のりって作り出した…白銀武の残光を掻き集めて作り出した人形

それを拾い上げる。ビルトラプター・シュナベールのコクピットに座る者へと問いかける

“シュロウガ”を経由して戦乙女たちの回線に問答無用で挟じ開けられたオープン・チャンネルにその姿が晒される

特徴的な触覚のような物

見ようによつては…その垂れている姿から兎耳に見られる形。色合いは白

目元を覆う大きなバイザー。鼻筋までも覆ってしまっており…人相の大部分を分からなくしており

体全体を覆う外套。強化装備の外部バッテリー搭載の外套に似た物
その上からでも、成人の平均よりか少し大きめの胸が……女と認識
させ

とても長い針金を途中まで通して立て、その場所から下ろした白を
基調とした蒼いツインテールが確定させる

袂に開けられた回線に映る姿。アサキムから問われた言葉に返事を
することもなく……

彼女は可変させ、シュナベールのマニピレーターが“不知火・零
型”のコクピットブロック。胴体の残骸を空中でキャッチしたのを
確認する

機体を再度可変させて——一気に戦域を離脱する

「つれないね。返事くらいしてもらいたいぐらいだよ」

離脱していく白いPTを呆れながらに見送ると

「さて……僕の用も済んだ。仕込みは——」

ユーチャリス艦橋にも繋がっているデータ・リンク越しに——呆
然とした表情を浮かべるゆかりを見据えて

「できた。まあ……出来上がるかは未知数だけどね」

期待半分、失望半分という表情で嘆息し肩を竦めて呟いたアサキム

に…

「アンタがあああああああ！！！！！！」

亦菲が乗る真紅のゲシュペンスト。GESPENST Mk—II
Type—Strength

その豪腕を、プラズマステークが雷鳴を迸らせながらに殴りかかる

「せっかちだね。君達は…折角、レコード・ブレイカー…これももう古いかな？」

襲い掛かってきた真紅のゲシュペンストの一撃を軽く捻る

その華奢なボディの何処に…特機並の出力とパワーがあるのか分からないも——現実には、亦菲の一撃を軽々に右腕だけで止める

失望した声音で続けられる

「LASTDIVERに助けられた命を捨てるつもりかい？」

掴んだ真紅のゲシュペンストの腕を無造作に引き千切る。まるで子供が遊ぶような無邪気さが見て取れる、ある種の優雅さで

「きゃあああああ！！！！」

「「「亦菲?!?!?!」」」

まりも、タマ、袴子達が機体を寄せてバランスを崩した亦菲のゲシュペンストを支え

みちる、水月、晴子、千鶴が各々の獲物を構えて、油断なく“シュロウガ”の矢面へと立つ

「まあ……僕はどちらでもいいんだけど」

投げやりな言葉であるが

「命を捨てて君達を逃がした、彼に申し訳ないんじゃないのかい？」

衛士である戦乙女達の背筋に冷や汗が流れる

目前のアサキムが見せた：特機を軽く捻る力。推定でも、捕まれば粉々にされるのは目に見えており

自然：間合いも慎重に取らざるえないといけないのは分かっていた

「さて、それじゃあ：僕は御暇するよ。君達と敵対する理由が今は無いしね：それに」

そう言葉を紡いだ瞬間——空間に歪みが生じると、データ・リンク内の国連軍及び米軍との回線に断末魔と悲鳴が昇り始める

「下の奴に捕まる厄介だし：」

響いた悲鳴に全員が目下の光景を目にした

そこには————ガウエインの自爆特攻を食らって、なお悠然と巨体を維持している：ノイ・レジセイアが

群がる国連軍と米軍を捕食するように食い散らかす姿があり

「レッド・オーガ鬼姫”に捕まるのも……些かね」

「あら？ つれないのですわね？」

空間の歪みが罅割れる。現れるは――

全身が紅い。そう血の色のような緋色で塗り固められたような骨のような装甲

フレームはそのまま真っ白い骨を使ったような異質なモノであり

各四肢を繋ぐようにして構成される部位は緑色の蔦であり筋肉のよ
うな躍動感に満ちた材質

頭部は鬼の面その物。両肩に乗る仮面とて同じような面つら

「ふふ。お早い到着で…」

「ごきげんようでございますわ。アサキム・ドーウィン」

ペルゼイン・リヒカイトを操る。人とアインストのハイブリット

アルフィミイの姿

「ええ。ですが……貴女と戯れる余裕は僕にも無く」

アルフィミイの挨拶に優雅に返しつつ、アサキムは眼下のノイ・レ
ジセイアへと“シュロウガ”の指先を指して

「貴女にも、僕と戯れる余裕は無く」

「ですわね。——ということでしたら？」

アサキムの言葉に頷き、可愛らしく小首を傾げて問うと

「この場は幕引きということ……またの機会に、奪^{……}わせて頂くよ。
“蒼き魂”にもよろしく」

慇懃に返して、アサキムは……戦乙女達とゆかりを一瞥して——転
神して場から亜音速の域で飛び立つ

「まあ、恐いわ……アクセルに守っていただかないと」

場の殺伐とした雰囲気とは噛み合わないほんわかな口調で大変そう
に口元を押さえて言葉にする

そうして——この場にはアルフィミイと彼女達だけが残され

「貴方は……」

代表してまりもが問いかける

「あら、自己紹介が遅れましたわ。私^{わたくし}、アルフィミイと申しますで
す」

そう告げ

「ですが……少々、私……立わたくして込んでおりました」

眼下のノイ・レジセイアへと視線をやるアルフィミイに対して

「貴女は……！アレの存在をご存知で……？」

剣呑な雰囲気がありをもを覆いだす

「ええ。貴女方のご質問に対する答わたしえを私は持っておりますが——」

アルフィミイの言葉に全員が食いつく。ユーチャリス艦橋に居る二人以外は

「先も言った通りに、立て込んでおりますの。詳しくは———その女性にお聞きくださいな」

その言葉を残す。式を作り出しながらに——彼女たちをこの戦域から逃すために

「どうい———」

まりもの問いかけは途切れる。展開された式は“この世界”に現存するアインストの力を流用した

亜空間経由の転移

ボース粒子とはまた違った白い閃光を残して、彼女達は掻き消え

阿鼻叫喚の地獄絵図

幾多の触手に絡め捕られ、男性は問答無用に殺され

女性は一——実験か何かの為か？捕縛され、その体内に取り込まれていく

戦術機も戦闘車両も…何もかも破壊しながらに蹂躪していく戦火の中で

「さて、私は私の成すべき事を成しましょう」
わたくしわたくし

その間伸びた声音は途轍もなく不釣り合いでありながら、しっくりときた

託す者、託される者

―亜空間

流れいく、不可思議な光景

赤、青、黄、緑、紫……様々な色が混ざり合っているのに黒にならない色合いが染める空間の中

誰一人として口を開けなかった

ユーチャリスと戦乙女達が乗る機体間のみしか、現状開かれていない回線内は…

25

戦域が離脱し他の友軍の怒声や激。命令が錯綜しない回線に成り果て

響くのは――――コクピット内の音。ハムノイズに……

苦い表情しか乗らない戦乙女達

タマなど……すすり泣きながらに目元を腕でぬぐう始末

誰もが―――言葉を発するという苦痛から逃れるように黙り込む

音にすれば、声にすれば……言葉にすれば

耐え難い現実を再度、突きつけられるのを分かっている故に

だが——何時までもこうしている訳にはいかず

彼女は口を開く

「…………説明…してもらえますか？」

唇が、乾ききった唇。その上唇と下唇がへばりつき…薄皮を剥ぎながらに唇が開く

部隊内。ナンバー2、いや…最早、部隊内トップの位置へと着かざる負えない女性

神宮司まりもが言葉を発する。眼差しはキツク鋭利に尖り、突き刺す

ユーチャリス艦橋。上段部のオペレーター席に座る……サラ・バデ
イムへと

伏せた顔。前髪に隠れて目元が窺い知れないも、纏う雰囲気は——

「ええ…………教えてあげるよ」

悲しみを逸脱し、怒気が噴出する

伏せた顔が起き上がる。隠されていた瞳が現れ、宿す感情は——怒り

どうしようもないほどの…八つ当たりのような感情

「君達さえ……居なければ……!!」

漏れ出す言葉。呪詛のような言葉

「マスターが……死ぬことなんて……！」

彼女の手元にあるコンソールモニターが示す事実

“ボース粒子の検出を認めず”

それは——愚者が脱出できていないという観測……

彼に残された最後の手段。ボソソジャンプ

ソレさえ行われていれば……サラがここまで

「君達が……居たから……！！！」

声を押し殺した呪詛を吐くことはなかっただろう

「どういふ……ことです……?!」

言葉が上がったのはみちる

彼女の表情は戸惑いが満ちている

微かな時の間に……異常事態に連続して見舞われ

拳句の果てには——知ってしまった事実

「どうして……我々が……居たからと……あの人が、佐橋少尉が」

言葉になるのを聞くのが恐い

そういう感情が彼女達の中にあつた。少なくともタマと禰子の中にはあつた

「死な…なければ…いけなかったと…!!!!」

呻き。それは真に呻きであつた

理不尽な言い募り、知ってしまった事実

仮面の男の素顔Ⅱ音を聞かせた少尉と同じという現実。そして――

心のわだかまりと未だ、折り合いがつけられないままのみちるは

無意識に――涙しながらに問う。鼻声になるのを押さえられないままに

行動が証明した。耳を塞ぐという行動がタマと禰子が証明した

「言っても…詮無い事とは分かつてる!!!!」

みちるの言葉に絶叫のような声音で言い返す

理不尽な八つ当たりなのは――心の端でわかっていた

わかっていても……止められない

えてして、人とは――

「けど……!」

度し難い程に――

感情に左右される生き物なのだから……

されど――彼女が紡ぐ言葉は、本当に……逆恨みに違いない。だって――

彼女達、ヴァルキリーズが居なければ

この……“あいとゆうきのおとぎばなし”が無ければ

サラ・マディガンと愚者がめぐり合うことなど……無かったのだから

気まず過ぎる空気が蔓延しだす。嗚咽するサラの言葉に

だが、しかし、このままでは……何も分からず、何をどうすればいいのかわからないままでは

再度……まりもが問いかけようとした時

場に音色が走る。優しい音。着信音。発生源は――

「祐樹!!!!!!!!!!」

村上ゆかり

彼女が持つPAKが音を奏でる

先ほどまで：虚ろな瞳で中空を漂わせていた表情は消えうせ

鬼気迫る面持ちで、もどかしげにPAKを操作すると

浮かび上がるは黒衣を纏う者。仮面を被らず：素顔のままの愚者の姿

「聞こえてるか……？」

画面に映った者の第一声に

「祐樹!!!!!!!!!!」

ゆかりは涙声で叫んで応える

答えるも――――

「ん……大丈夫そうだな」

涙を流す大切な幼馴染相手に返す返答ではなかった

それもそうだ。何せ……この映像は

「…どう、切り出したもの…か。まあ、その…」

画面の中の愚者は頭を掻き、明後日の方向に視線を彷徨わせた後

「これが……流れているってことは、俺は」

告げた――

「死んだのだろう」

幼馴染の瞳が光が消えた

「……スーツ側に設置した発生器ビークンが途絶えたら……流れるようにセツトした」

彷徨っていた視線が、しっかりと前へと向く。映像を撮っているカメラへと

「だから……これが、流れてるって事は――」

向けた視線の中に……気拙いモノが漂いだすも

「……辛気臭いのは、よそう。結果は結果だ。俺みたいな奴でも……少しは役に立てたはずだ」

頭かぶりを振って、努めて明るく言い切る

「はず……だと、思いたいな」

まあ……言い切れないのがこの患者の性分

面を上げる。天井でも見ているのだろうか？画面から窺い知れるのは患者の首元だけ

「…本題に入ろう。……もう、俺にはどうにもできないのだろう」

再び下りてくる。言葉を紡ぎながらに

「だから、保険として…この映像を残した。お前に」

真っ直ぐに

「ゆかりに、ゆかりだからこそ」

幼馴染の瞳にぼんやりと光が戻ってくる

愚者が紡ぐ…己の名を呼ぶ声に

「俺を救…ってくれた。お前だからこそ——託したい」

愚者の切なる声音に惹かれて、“憎しみ”のスフィアを宿す女性は一瞬顔を上げる

その声音を持つ愚者を見据える為に

「我儕だと…分かってる。お前にとっては理不尽な押し付けかもしれ

れない」

苦く紡ぐ

「未だ……“真実”を知らないお前には、意味の無い事だと思うかもしれない」

必死に紡ぐ

「けれど、それでも……この願いだけは——捨てられない」

胸元に拳をやる

「捨ててしまったら……《俺》が“俺”を許せない」

断言する

「今ですら……度し難いというのに、願いも想いも捨ててしまったら……本当に俺は——」

吐露する

「ごめん。取り乱した……」

息を吸う。吐く。肩に入れた力を解く

「…ゆかりのPAKの方にメインを移した」

メイン。メインプレイヤー……タイムダイバーの

「その力が……何処からやって来てるのかは分からない。けれど」

画面の中の愚者が瞳を閉じる

「それだけが、俺達の手札であり————切り札」
ジョーカー

手繰り寄せる。自身のPAKを

「サラも居る。ノルンも居る……この事を話せば、二人がサポートしてくれる」

瞳を開ける

合間が空く。言葉を搜して

中空に視線が漂う……微かな時間

実際は一分も経っていないだろうが、長い時を感じさせる

「物事を悪く考えすぎるのが、俺の欠点と……お前が言って、直せと言われたけど……」

頭を掻く。どうしようもないという表情で

「悪いな。性分だ。多分……一生直らない」

自嘲の声音で紡ぐ

「コレが無駄になる事を切に願う。……けど、多分」

ソレが必然だと、愚者は思うから

告げる

「天罰が落ちる。……どうしようもなく、な」

瞳が濡れていた

声音が少し震えていた

だが――

「“結末”^{うんめい}を変える事が……罪なのか」

それでも――

「俺が“この場所”に居ることが……罪なのか」

そう悟らせない為に

愚者は演じる

「だけど、これだけは胸を張って言える」

己自身を

「あの結末を変えてたくて」

今だ…仮面に隠された臆病な自分自身を演じる

「彼女達の未来を見たくて」

仮面^{ゼロ}を演じなければ、闘えない程に弱い己を

「“幸せな結末”^{ハッピーエンド}が欲しいから」

たとえば、あの時には架空の世界の住人であると認識していても

其処に描かれた物語に涙し、その先を見たいと願った気持ちだけは

誰にも否定できるモノではない

それは、愚者が愚者足りえるモノなのだから

「俺は——」

映像が乱れる。記録しておける容量が限界に近いのか？

ただ…分かる事は

「
」

最後の言葉が音になることは無かったという現実のみ

映像が……終わった

場に静寂が戻る

いや……すすり泣く声音が微かに響く

何人とは断定しない。けれど…一人、二人だけではない音

途轍もなく、言い知れない感情に皆が襲われる

真実…何もわからないまでも、紡がれた言葉に乗る感情だけは

嘘偽りのない。真心が込められた、生の感情が込められた

言の葉ことばだから

「……………真実を」

言葉にするは…よりも

「教えてください」

直向に向ける。真っ直ぐに向ける

感情と成すべきことが重なっているからこそ

より強く、より鋭さを持った有無を言わせぬ視線

それに晒されるサラ

先の映像により…………感情を吐き出す術を失った——否、感情を吐き出す訳にはいかなかった彼女に

「……………ッ」

思わず：唇を強く噛む。血が出るほどに

なぜ？どうして？

こんなにも――

――憎らしいって……思っちゃうのかな？……ハハ

自嘲が心中を総べる

心の激しき部分は憎しみを

心の冷静な部分は諦観を

二つの心が見出す。その回答を

――どんなに……想ったって……僕は彼女達ほど

残された映像から漏れ出していた感情など…

一度たりとて向けられた事などない

だからこそ、だからこそ――

――求められたことなんて…無い

顔が崩れるのが分かる。涙でクシャクシャになりそうになるのが

だが、此処で崩れてしまえば——完全に負けを認めしてしまう

己の感情に、己が抱く想いが……相手が分かっているくとも

自分自身が自分自身に負けを認めさせてしまう

それだけは、嫌だと

——負けたくない

まりもの問いの答える為の準備に見せかける

半透明のモニターを彼女達の目前に展開させつつ、注意を反らしている間に微かな涙を拭う

震えそうな声音を心中で叱咤して

「教えてあげる。君が言う……“真実”って奴を」

ヴィレッタ・バディムが持つ一つイメージ

冷徹なる女を演じるように冷たき声音でサラは告げた

戦乙女達

―亜空間 ユーチャリス 休憩所

窓辺から見える景色に変化はない

未だ、様々な色合いを見せる景色を

マジックミラー式の詰められた窓から見やりながらに

額を冷たいガラスに当てながらに

「……………はぁ…」

小さな溜息を漏らす。漏らすしかないという面持ちで

彼女――――風間禰子は曇らせる

窓辺に立ち、付くか付かないかの間際までに寄せた唇が

ガラスを曇らせる

己の心を曇らせる

瞳の焦点がズレ、窓ガラスに映る自身の瞳と虚像の瞳が交差し

ガラスを濡らす

己の瞳を濡らす

「禱子」

少し：低めの声音と共に頬を暖かい物が当たる感触によって

後ろを少し見やった禱子の瞳に写るは

「美冴さん：」

「カフェオレを持ってきた。少し：啜るといいよ」

微かな微笑みを携えて、両の手に持った紙製のコーヒーカップを翳して

宗像美冴が禱子へと催促する

差し出されたカップを両手で包み込むようにソツと手にかけて受け取る

まるで……無くしたくないモノをその両の掌で守るように、その白と黒が織り成した茶色を見つめる禱子

その様子に、美冴は肩を軽く窄め禱子の肩を抱くようにして

近くのソファーへと禱子を連れて座る

為されるがままに座る。その隣に美冴も腰掛けて

二人で隣り合って座る。静かな静寂が二人の間に横たわる

どちらも…手にしたカフェオレに口をつけることなく時だけが過ぎていく

どれぐらい、そうしていたのであろうか？

決して、強い力で握り締めた自覚はないまでも…手に持っていた紙製のコップが少し拉げているのを

ぼんやりとしていた椅子は、気づいた。いつの間に？という面持ちで、呆然と煩雑な意識の中で意識した時

その歪むコップの中を満たすカフェオレは冷め切っており

「……………すみません。美冴さん…美冴さんもツライのに」

より一層と力が手に籠る

紙コップが断末魔を上げるように、くしゃりと崩れる

カフェオレが飛び散る。椅子の手を汚す

まるで————血潮をぶちまけた様に

黙って…備えつきの布巾を取って美冴が毀れたカフェオレの処理をしだす

「…美冴さんはツラく…ないんですか？」

不思議そうに、憔悴して目の下にクマと作った顔で美冴の表情を覗き込もうと

自身の膝を拭く…顔を伏せている美冴へと向けると

なんとも表現しにくい…面持ち

疲れたようであり、哀愁と愛執を覗かせる…形容しがたい表情^{モノ}

言い表せる言葉を精一杯使えば——暗く沈んだ瞳の色を持ちながらに泣き笑いを浮かべた面持ち

「……ごめんなさい…！わ、わたし…じ、ぶん…ばっ、かり…で…！」

「謝らないで靖子。……私は」

美冴の表情を見取ってしまった靖子は思わず…涙が溢れそうになるも対照的に美冴の表情は——

「もう、泣けないみたいだから…」

最早、疲れきった瞳が全てを語っていた

「美冴さん……！！」

思わず、美冴の胸元に飛び込むように顔を埋める靖子

受け止め、その長い黒髪をあやすように梳く美冴

ポツリとポツリと

「変わりに……袴子が泣いてあげて。私の分まで……亡くし過ぎて」

「涙が涸れてしまった——私の分までも」

言葉を紡ぎながらに、頬を寄せながらに

——正樹

胸中で一度だけ名を呼ぶ

しばらく、袴子のすすり泣く音だけが室内を満たす

「……落ち着いた？」

「…はい」

美冴がそう問いかけ袴子が掠れ気味の声音で返事を返した時

この部屋へと繋がる二つの扉から同時に人が現れる

片方は一人だけで、片方は二人。どちらも女性

……現状、女性しか乗っていないのだから当たり前だが

そのある種タイミングのいい登場と同時にということ

「ふふ……盗み聞きとは趣味が悪いですよ？」

右方面の扉から入ってきた

「大尉」

伊隅みちると

「速瀬中尉。涼宮中尉」

左方面から入ってきた

速瀬水月と涼宮遙へと悪戯っぽく告げる

「…あちゃー…やっぱ、微妙だったかー」

「もう…水月」

ワザとらしく水月がやってしまったという表情ですっ呆けた声音で

罰の悪そうでありながら茶目っ気が隠された表情で告げ

遙がソレを窘める様に、苦笑しながら告げる

「む…ん…聞くつもりは無かったのだがな…」

対してみちるの方は根が真面目であることから

すまなそうな表情で顔を顰めながらに答える

「声。漏れてましたか？」

「いや。そうではないのだが……どうも、な」

「まあ……こっちもですね。伊隅大尉」

「…皆さん、感じることも諳んじる想いも同じ。ということでしょうか…」

美冴の問いかけに

みちるは否を即答するも続く言葉がないのか

水月へと視線をやり、水月はみちるの言葉を中継する形で受け取って

遙へと繋ぐ。旧ヴァルキリーズ、オルタネイティブメンバー以外の戦乙女達のみが集まり

「……やっぱし、新人共には見せられませんからね。こんな姿は」

美冴が紡いだ言葉に全員がゆっくりと苦笑いを浮かべながらに頷く

互いが互いにどうしようもないという表情で

中央のソファ。二つある二人掛けを美冴と禰子が占領しており

対面の同じものに水月が移動していくのを確認し

それらの端、中央に置かれたテーブルを囲うように並べられた全てのソファの内

一人掛けの物へと腰を下ろしたみちるは……大きく息を吐いて紡ぎだす

遙がティーサーバーから全員分のカフェオレを用意して持ってくる姿を確認しながらに

「……“極めて近く、限りなく遠い世界”」

カフェオレの紙コップがテーブルへとコトリと音を微かに鳴らして置かれる

「まさかの……異世界人とは」

美冴は遙より直接二つのカップを受け取り

目元を腫らした顔を美冴の胸元に隠れたままハンカチで整える痔子の分を

テーブルへと置いてから返し

「それも、遙か先の未来人で……」

呆れた口調のままに、コップを手で会釈しながら陽気に感謝を述べる水月が続け

「私達の“世界”とは異なる歴史を歩んできた世界からの……」

最後のみちるへとコップを渡して遙が言葉を紡ぐ

「おかげで……ある程度の合点はいった」

茶色の水面に自身を映して、ソレを見据えながらに

「既存の戦術機を遥かに越える性能を持つ。ゲシュペンストシリ―ズの出自やらな…」

一口啜って言い切る

「……だから、ですか。ああも、ポンポンと札が沸いてきたのは」

「だろうな。でなければ……アレだけの物が一切の噂もなく世間に出てくるはずが無い」

「ですが…大尉。少佐はなぜ……」

「なぜ…か…。言われてみても実感が湧かないものだ」

再度、茶色の水面へと視線を落として

「私が戦死するという。未来があるというものは――」

吐息を漏らす

「宗像、風間。涼宮少尉のみしか生き残らなかった未来があるなんぞ……」

虚空を見上げる

誰もがその言葉に返す言葉を持たないも――

「嘘は…言っていないでしょうね。あの態度からしてみれば」

水月が声を上げる

「嘘をつくにしても、こんな馬鹿げた話をぶちまけると思えるか？速瀬」

「…ないですよ。けど、まあ…正直な話、あり得るといえば完璧にあり得るでしょうね。それに——」

全員を見渡ししながら水月は

「ここに居る人間。全員がその覚悟をとこの昔に決めていますし——」

「衛士。いや、軍に入った者…全てが覚悟していることでしょう。だから——」

「私達の誰もが…嘘だと言い切れない」

何時か、果てる時が、必ず、来ると、分かっているからこそ

彼女達はその話を最後まで聞き入れられたのだ

やがて…やがて、何時か辿り着く為に——人類の勝利という頂に辿り着くための屍の道になる覚悟を持つからこそ

誰もが沈黙する

水月が紡いだ言葉が押し掛かるように、真実を捉えている故に再び、静寂が室内を覆いだす

「未来が……見たい、か…」

だが、静寂を破るのも…また戦乙女達であり

みちるが洩らす。吐息のようにして虚空へと躍らせるように視線を白亜の色をたたえる天井を見上げながらに

「我々の未来など、同じようなモノですのにね…」

美冴が肩を竦め、片目を閉じておどけた様に告げ

「美冴さん…」

隣にちゃんと座れるようにはなった椿子が苦笑いで応じ

「宗像くあんた、ホンつとに性格悪いわよね…」

糸目でジトツとした瞳のままに睨む水月

「まあ、まあ…水月」

困ったような笑みで押さえに回る遙

彼女達を見渡して、一呼吸…浅く息を吐いて吸って

「我々は、元より死を受け入れた者達だ」

見渡しながらに告げる

「衛士とは、正しく…死して礎になることを義務付けられた存在」

「軍が、なぜ我々に高い金を掛け…優先させるか——」

脳裏に描くは…先に死した仲間達

文字通り、化け物達へと乾坤一擲を穿ち、守るべき者を守る為に散った者達の姿を描いて

部下であり、戦友であった仲間達を思い描いて

桜の木の元に眠る者達を描いて

「我々…衛士だけが、BETA共に打撃を与えることが出来るからこそ」

最前線に立つ。戦の花形になる

其れは——裏を返せば

「真っ先に死んでいくことが必然となっているというに…」

死んで来いということ

戦術機という剣が折れる。その時まで……化け物共の狩り続ける

「だというのに——」

「生きることをあきらめるな」

「「少佐?!」「教官?!」」

「き、聞こえておりましたか…」

若干、焦り気味で赤くなった顔のままのみちると

「防音性皆無のようですね…」

美冴が呆れた表情で言葉を吐くも

部屋に入ってきたまりもの答えは……天井のある部位を指差すという行動

一同、その先を見つめると——

「まあ……彼女なりの気遣いでしょうね」

まりもが全員が指が指す場所にある…埋め込まれた館内スピーカーを確認して

納得する。それぞれ、様々な表情を浮かべて

少し腫れぼったい瞼を晒しながらも

ことさらに済ました表情で皆を見渡しながらに

再度、紡いでいくまりも

「足掻いて欲しい。たとえば、どんなに絶望しか見えなくても、周りになんと言われようとも」

諳んじるように

「生きることに、執着、して…欲しい」

祝詞のように

———死なないでくれ

懇願のように紡ぎきった

「「少佐…」」「教官…」」

紡ぎきり天井へと顔を向けるまりもに對して

全員が呼ぶも

まりもは反応せず…ただ天井へと視線を向けたままに

「死ぬなど、諦めるなど、言っておきながら——」

「自分だけ……自爆するなんて、ね」

嘲けりが籠る声音で洩らす

「……少佐」

「分かってるわ。あの人が…そうしなければ、私達全員が全滅して
いたことだもね……」

「でも、それでも…」

思い出すは207訓練部隊の任官式

想いを吐露するように、感情がありありと籠った声音のままに

紡がれた言葉を刻んでいるからこそ——

「やはり……少佐は」

栲子がそう問いかけるのに対して

言葉にせず、ただ首をゆっくりと縦に振って肯定

「……………」

椅子の問いかけとまりもの答えに息を微かに吞んで

二人へと視線を強く向けるみちる

美冴も水月も遙も……その様子を見守り続けるのみ

「風間は」

「私は……少尉を」

「そう……。あの時の反応からしてみれば、何処かで会っていたということね……」

「はい。以前……ピアノを弾いておられる所で出会いました……」

「ピアノ？ふふ……風間の方が、あの人の事を知っていそうね」

自嘲気味に紡がれた言葉

反射的に椅子は

「知っていそうですか……。いいえ、私は少尉が、少佐であることを知りませんでした。それに……二度しか、お会いしたことはありません」

キツパリと言い切り

「……あの時の叫び。佐橋……少佐の名でしょうか？」

やつかみと羨ましさが微かに滲む言葉で真っ直ぐにまりもに問う

「…ええ」

「なら、なら！！私よりも！少佐の方が、教官の方が！！よっぽど、あの人を知っています！！」

声が自然と荒ぶる。荒ぶるしかない…

「私は——私は……！！」

顔を両の掌で覆いながらに掠れながらも、言葉を紡ごうとするも

言葉になることはできず…途中で崩れ落ちていく。力なく、ある種の悔しさに身を浸して

——わ、たし…は…

そんな二人のやり取りに食い入るように見続けるしかないみちる

ただ…二人の言い争いに胸の置くが締め付けられる痛みと

小さな刺し傷で出来た穴から血が垂れてくるような痛みを

抱えるしかなく……自身の言葉を紡ぐことも出来ぬままに

三度目の静寂が場に満ちだし始める

美冴は生来の気質も引っ張って…どうにか変えたいのだが

隣で顔を覆って泣くしかなかった褥子のことが、どうしても放っておく事ができず

遙は、本質的に引っ込み思案的な部分がある為に…オロオロと事態を見守るしかできず

故に、彼女が動く。こういう場面をもっとも嫌いそうな

勝気な少女——速瀬水月が

スッとキッチンのほうへと身を動かす

誰もが言葉を発せ無い状況。ただ彼女の動向へと視線を向けられる者は向ける

そうして…キッチンへと引っ込んで目的が達成できたのか？

手に包丁を持って現れた水月

それに視線を向けていた者達がギョツとし

そして、緊迫した空気が張り詰めていこうとするも

彼女は、無造作に——

「「「え……?」「」」」

「み…みつ…き…?」

遙と袴子を除く者がポツリと言葉を落とし

遙のみ…水月の名を呼ぶ

「あーあーあー！もう、見てらんない！！！！」

自身の背中に流したポニテールを

バツサリと切り落として

「めそめそ、めそめそ…と！アンタ達は！！」

肩口までになった髪を振りまいて

犬歯を剥き出しするほどの剣幕で

「どうして、どうして…！あいつ等の想いを汲み取ってやんないのよ！！！」

怒鳴りたて始める

「宗像ああ！アンタだって分かってるでしょう？！」

「…速瀬中尉」

「アンタの想い人の気持ち、分かってるんでしょう？！」

水月の剣幕と声音。ソレに怯んだわけではないが…その言葉の本質に怯んでしまう美冴

最後の言葉を思い出す。前島正樹が遺した言葉を

——幸せになれ

ただ、一言。微笑みと共にくれた言葉だけが…胸を疼かせる

「孝之は言ったわ!」

思い描くは、重頭脳級に対して

果敢に攻め立て…時を稼いだ想い人の姿

「元気でな!! って、アイツはそう言い遺して……!」

虚空へと消えた姿を——

「私達に明日を残して……!!」

荒ぶる感情を叩きつけるように声音に乗せて叫んだ

肩で息をするほどまでに、少しだけ…息を整えて

「最初は…胡散臭い奴って思った」

「変な格好で、しかも慇懃丁寧、どんなモヤシ野郎だと思ったけど…」

思い出を起こす

ヴォーグルデータをただ一人で潜り抜け

様々な兵器を持ち込んで：理不尽なまでの圧倒さ

「けど、アイツは」

何時だって：彼女達、ヴァルキリーズを保護するかのよう

動くその様に怒りが込み上げてくることが何度もあったが

「アイツは、ゼロは――」

隠された事実を突きつけられれば

未来を知っていると分かった。今となれば

「死なせたくない。ただ、それだけってことですよね？」

陽気な声音で目元の涙を隠すこともなく晴子、千鶴、タマが室内へと入る

「除け者にしないでくださいよ。私達だってヴァルキリーズの一人なんですよ？」

「柏木……」

「正直……分相応かなって思っちゃうんですけどねー。私達に何で…此処まで肩入れするのかって」

「でもね。正直、言って関係ないんですよ。そんな理由なんて」

全員を見渡しなごらに

「あの人が、私達の未来さきを見たいって思ってくれたことに」

「…ふふ、速瀬中尉。物の見事に持っていくれましたねー」

「ううう、うっさいわ!! 宗像あぁ!!」

晴子の言葉を皮切りに美冴が何時も通りの態度で水月をからかい始めると

場の張り詰めた空気が霧散していき――

「と、に、か、く!!」

再度、注目を集めるように一字一句強く言い放って

「未来みらいを見せてやろうじゃない!! アッチあっちで羨ましがりそうな程に――」

「明日が――」

―2001年 11月11日 日本帝国 帝都城内 庭

「――欲しい。……か」

満点の夜空は…あの時と同じ、

初めて、夜に交わした言葉

月明かりを浴びて浮かび上がる漆黒の姿

まるで何かを求め欲するような

遙か彼方にあるモノを掴もうと

もがく一人の黒髪の男を……

思い出す。思い描く。瞳の中に描く

皆琉神威を地に突き立てて、遠くを見据える

闇を統べよと名づけられた剣の少女——御剣冥夜は

「少佐……」

夜空を見上げて、想いを吐露するように洩らす

あと、微かで…戦火が渦巻こうとする場所で

“堕ちた”蒼VS“敗れた”青（前書き）

しばらく、時間軸的に同じ時間を書くので

シーンが飛び飛びで分かりづらいかもしれませんが：

“墮ちた”蒼V S “敗れた”青

―ユーチャリス 展望台

実験艦ながらも、ナデシコ級の名を冠するこの船には

ナデシコAの面影を随所に取り入れている部分がある

まあ……本来の持ち主たる“黒の王子”は一切、触れることも近寄ることもありはしなかったが

その恩恵を受ける者が、今この船には居り

「水月……」

傍らで窓の外を見つめる

髪を切り落として、短髪へと姿を変えた水月へと

不安げな声音で訊ねる遙とは裏腹に――

「何、そんな不安げな表情で？」

「だって…水月、その、髪……孝之君が気に入ってたからって…」

言外に伸ばし続けていた理由を告げる遙に対して

「そう…ね。そう言えば、そうだったかな？まあ、アイツは髪でも伸ばしてもっと女らしくしろって言ってたけどね」

意地悪そうで若干のほど不機嫌な強面こわもてで

あっさりと返す水月

「なあに？もしかして、遙は後悔してるって思ってるわけ？」

「別に…そうじゃないけど…でも、孝之君が…」

その先の言葉を紡ぐことは出来なかったが

水月には手に取るように理解できており

「ま、アイツが逝った時でも…切らなかったけどさ」

今はもう、無くした腰元まで届く長い髪

それが在った場所へと手を翳して、空を撫でる

「はじめ、かな…」

「……はじめ？」

「そう、はじめ。正直さ、なんで…アイツがあ場所に現れたのか」

天井を見上げる

遙と隣り合って座るベンチの背凭れへと深く沈みながらに

「結局、分からず仕舞いだったけどさ……」

瞳を閉じて、あの時の光景を思い出す

二度目の最後を迎えるというのに――

笑って逝ったと思われる。掻き消えてしまった想い人の姿を

「死んでも、私達の事を案じていたってのが」

瞼を開ける。現れた瞳に乘る決意の色合い

それを隣で見据える遙へと

「悔しくてさ……私達あたしはそれほど、あの馬鹿に心配されてるってことが」

苦笑いを力なく浮かべながらに

「嬉しくもあって……悲しくもあったから……」

「水月……」

遙もまた、力ない声音で返すしかなく

水月はそんな遙を一瞥した後、立ち上がり

大型のマジックミラー式の強化ガラスから見渡せる外へと向かって歩いていく

亜空間と水月を隔てるガラスへと手を当て

「だから——」

ガラス越しに外へと遣っていた視線を戻す

室内へと、未だ座ったままの遙へと真っ直ぐに

「コレが私のけじめ。孝之^{アイツ}を引き摺ったままじゃ——」

揺ぎ無い言葉で

「孝之^{アイツ}に笑われちゃうから、ね！」

茶目っ気が満たされた瞳。その片方を軽く瞑って

人差し指を立てる水月

「ふふ……そうだね」

そんな水月へと優しさが満ちた笑顔でありながらも

声音には可笑しさを堪える響きが混ざっており

「ちよっ?! 人が決めてるってのに、遙ってば!!」

先の動作は自身でも恥ずかしいかな? という風には自覚していた
水月

あつさりと真っ赤にして抗議させるものであった

―2001年 11月11日 帝都 中庭

然したる日々が過ぎた訳ではない

冥夜にとって、彼との出会いからは一年にも満たない時間

だというに――

「少佐」

一言。口から漏れた

走馬灯のように、数々の焼きついた思い出が蘇る

未だ：20歳にもならない人生であるが

この一年にも満たない期間に体験したことは

自身の今までの軌跡を凝縮したような濃密さ

何もかも。まるで昨日のように鮮明に思い出せるも

「少佐…」

ただ、此処で見上げるしかない己の齒痒さを？む

紆余曲折。何の因果か……再び、姉たる悠陽と

「私に、“力”があれば……！」

共に過ごせる様になった。その僥倖とは真逆して

將軍家。それも今代の煌武院悠陽の実の妹という血筋は

冥夜から戦場を奪うことになった故に――

臍を？む

地に突き立てられた皆琉神威を押し込める両手に

力を込める。戦慄く様に

ただ、御剣冥夜は……

「皆……無事で居てくれ……」

此処にたって願うしかない。仲間達の安否を

災厄の始まり。最初のハイヴへと飛び込んでいる者達の

無事を祈るしかなく

……時刻はもう、朝焼けを迎える時間

順調にいけば、もう間もなくで“桜花幻影作戦”終了予定時刻

作戦の成否は騎士団を直轄している悠陽の手元にも真っ先に伝わってくるようになっていると

冥夜は聞いている為に

「そろそろか…」

憂いげな瞳を一度閉じて、悠陽が待つ私室へと足に向け始めた時――

「冥夜…！冥夜…！冥夜は何処いづかしに居りますか…?!」

私室のある位置がこの場所から都合、二階部分に当たる場所に在る為

血相を変えた悠陽が窓越しに此方へと視線を彷徨わせながらに

悲鳴の様に呼び立てる。その姿に

「姉上?! 私は此処に居ります!! 如何なされました?!」

見たことも無い悠陽の取り乱しように

釣られて冥夜も盛大に言葉を返す。胸中を過ぎった…嫌な感覚に突き動かされるように

走りながらに悠陽が立つ場所の真下へと向かう

「冥夜！ゼロ様が……ゼロ様が！」

「！！今、向かいます！！」

その血相を変えた姿を前に逸る気持ちを抑えられず

柱。木材の柱。この御時勢でありながらに合成物ではなく

天然の木材を使用された日本帝国の象徴の一つ。帝都城の風格を損なわないように

配慮された代物であったが今、この急かす心が躊躇えば……大切な何かを逃してしまうと

囁く心の声に従って冥夜は――

「ふっ……！」

皆琉神威の刃を解き放ち

柱へと突き立て、その上へと掌を押し出し……ムーンサルト宙返りそのもので

足を頭上よりも上へと遣りつつ、柱に突き立てた皆琉神威を上半身の筋力を持って引き抜きつつ

悠陽が立つ窓辺へと一足跳びで辿り着き

「姉上！」

「め…冥夜、とにかく中へ…」

血相を変えた表情は、近くで見れば…顔面蒼白と言ってもよいほどであるが

悠陽が纏う將軍という風格。民を導く血筋が織り成す覚悟が…気丈に振舞わせようとするも

血を同じくする冥夜相手には

——— いったい、何があったというのだ………?!

その心中は筒抜けであり、悠陽の肩を抱きながらに共に部屋へと入った冥夜を待ち構えていたのは

クーデター戦。その最終の形である…斑鳩栄司との盤上での攻防の際に

預けられたままであった———

「こ、これは…」

祐樹のPAKから…ホログラム映像が現れていた

「……突然の御無礼を失礼致します」

“二人が揃ってPAKの前へと立った”時

浮かび上がったホログラムの祐樹が慇懃に礼をしつつ

「煌武院殿下、並びに御剣冥夜様」

畏まった口調のままに二人へと挨拶を始めたことで

「少佐?! そんな…私はそんな呼び方で貴方に呼ば——」

冥夜は反射的に祐樹へと言葉を返すも

「不躰な時間にコレが再生されないことを祈っておりますが……当該となりました時には平にご了承を賜りたく存じます」

その言葉に返答されることは無かった

そも、当然。この映像は——

「些か…不躰ではありますが、本題に入らせて頂きたいです」

幻像である祐樹の声音は、完璧にゼロとなっており

その口調も何処か冷めた感覚を齎せるものであるからこそ

「この映像が流れているということは——」

「私はもう、この世に存在しておりません」

音が消えた。そう錯覚してしまうほどに

二人にとっては…その言葉は信じられない

心が虚脱しそうになるのを自覚し、全身の血の気が失せた様に

思考が逸脱しそうになっているにも関わらず

「保険の為に…残しておいた物です。お二人のこれからの武運長久を願うと同時に」

立ち続ける。双子の姉妹は

「最後まで、剣の役目を果たせなかったことを…お詫び申し上げます」

その身に流れる…脈々と受け継がれてきた“ノーブレス・オブリージュ高貴なる者の義務”

「…些か、世迷言になりますか…」

自身が築いてきた人生。その糧を総動員して、二人はただ、仮面の幻影が紡ぐ言葉を聞き入れていく

「共に居れた日々に、感謝を」

幻影の中、ほんの微かではあるが…その奥に沈む佐橋祐樹自身の顔を

「…：紛い者である。俺ですが…：真実、この想いだけは」

覗かせていく。片手を仮面へと押し当てる

空気が抜けるような音と共に

「偽りではないと、この想いだけしか持ちえなかった男ですが」

素顔を晒す。最後ぐらいは

「役に立てたと思わせて頂きたく……存じます」

自分自身で

「……これから先の事は、騎士団のサラ・バディムとノルン・マデイガンが力添えを担ってくださいましょう」

紡ぐ。片目、左側を完全に黒髪に覆われ、機械仕掛けの金色の瞳を軽く閉じ

「茨の道となりましたが、お二方に幸多からん事を」

ゆっくりと瞳を開けながら

「冥府で祈っております。どうか……よき未来を手繰り寄せんことを」

諦観した表情とホッとした安らかな表情を掛け合わせて

「切に。……親愛なる我が仕手、煌武院悠陽殿下及びに御剣冥夜様」

ゼロを演じながらに、自身の想いを幻影は告げた

映像が途切れる。幻影が掻き消え…光が収まったPAKが畳の上に転がっているだけの風景へと

戻った室内。ゆっくりとした衣擦れの音が微かに上がる

冥夜も悠陽も…互いに互いを支えあうように涙の雫を模したPAKの前へと歩み寄り

悠陽の右手が伸びる。冥夜の左手が伸びる

お互いが図り合ったかのように畳の上に転がる…PAKを拾い上げる握手するかのように互いが互いの掌で感じ取れるように、包み込みながら拾い上げ

「「……ッウ！」」

微かな呻きのような声音が漏れた

包みあった手はさらにお互いの開いている手を重ね合わせ

その掌に収まる物を守るように強硬な殻のような形

其れへと二人は…自身の額を押し付ける

斜め上から当て合う為に、額の下側は肥大した拳の形になった手につけ

額の上側は…必然的に、互いの写し身。血を分けた双子の姉妹の体温を伝える

互いに自覚しあう

鏡のような二人の存在だからこそ、其処に映る感情は己自身の物だと本能が告げているからこそ

仮面かめんの男は消えたのだと、誤解した

しかし、悲観にくれている時間すらもなく

神聖にして犯すべからず

そのような場となっているというのに――

戦火は…

閉じた瞼越しにも強烈に知覚できるほどの発光を二人は感じ

化け物アインストは…

白き発光現象を起こした場所へと視線を向ける

其処に立つ――

蒼き墜ちた餓狼……“鋼鉄ペーオ・ウルフの餓狼”

リボルビング・ステーク
その杭撃ち機が二人が座す場所へと

振りかざされる。最早、回避不能の間合い

体格対比からも分かる通りに――

片や生身の肉体で、片や鋼鉄の巨人

比較にすらならず…飛び出した所で過剰殺戮オーバー・キルの一撃を避けることは

不可能。奇跡でも起きない限り…その死の一撃を回避することは二
人には出来ないまでも

「くっ…！」

衛士。戦闘者。武士。戦場常在の身たる冥夜が悠陽よりも早く反応
する

「冥――！！！」

焼け石に水どころか…何の意味もなさないであろうと醒めた部分が
告げながらも

悠陽に覆い被さり、自身を盾にしなごらに思い出す

幻影越しに…別れを告げられた男が残した言葉を

――生きることをあきらめるな

あの時も、先のように…垣間見られた。ほんの少し、微かなものであったが…仮面^{ゼロ}ではなく佐橋祐樹自身の顔で

———死なないでくれ

想いを洩らした。あの時の言葉が…湧き上がる。せり上がる。脳裏を掠める

だからこそ、みっともなく転がりながらも

生へと、明日へと

「貴方の言葉は———まだ、」

未来^{未来}へと

「生きている！！！！！」

足？くからこそ！

必滅を約束した間合いを

無骨な杭打ち機を払う。NOEの速力のままに滑翔し、勢いを余すことなく

そのスーパーカーボン製の刃へと乗せて打ち払う。リボルビング・ステークが乗る右手の肘間接に値する接合部に袈裟懸けを見舞って

鉄と鉄がぶつかり合う。盛大な火花が散り…木材構成の城の一部に微かな焦げ痕を作る

打ち払ったステーキの切っ先が見当違いの場所へ食い込み……“鋼^ベ
イオ・ウルフ鉄の餓狼”が踏鞴を踏む

予想した衝撃が…一切来ず、代わりに二つ三つ先の城の一部が崩れる轟音が鼓膜を打つことによって

身を起こして周辺を把握しようとした冥夜の瞳にその姿が映る

“この世界”の“青”

将軍専用機と同じ形式番号を持つ。Type—00R

「無事か？将軍殿下、冥夜嬢？」

ソレに搭載された外部スピーカーから発された言葉は

淡々とした声音であり、抑揚の無い平坦な声音でありながら

戦術機自身が身に纏っているような

烈火の気迫を纏う——

「敗者が……しゃしゃり出て来る羽目になるとはな…」

“元”斑鳩家当主にして：“青”の衛士

“高貴なる者の義務”を持つ武士
ノーブレス・オブリージュ

「だが……私が未来を託した者が化け物ごときに狩られるのは我慢ならん……」

“武御雷”を纏い……その腕に74式近接戦闘長刀を持たせ

正眼の構えをやや崩し、切っ先が地へと向かった姿のまま

「正道に反するが、コレもまた我が人生よ」

自嘲がゆっくりと込み上げる声音で言葉を成して

斑鳩栄司は“鋼鉄の餓狼”へと向かい立つ
ベール・オブ・ウルフ

願いを先へと――

―ユーチャリス 個室

時間は微かばかり遡る

腰掛けたベッドがたった一人しか居ない

個室で音を立てるモノがない故に：彼女

「ゼロ：」

膝を抱えて顔を埋め込むように伏せてしまった崔亦菲が立てた

ベッドの軋む音がやけに――彼女自身の鼓膜に響かせる

その音を更に奏でていく

右足を揺らす様に少し、上げ下げする

体が左右にゆらゆらと動く

左足を揺らす様に少し、上げ下げする

体が左右にゆらゆらと動く

…そうして

「ゼロ…」

ボスツとベッドの敷布団へと体を倒す

壊れてしまったヤジロベエの如くに…

力なく倒れる。紡ぐ…名の者が寝起きしていたベッドへと倒れこむ

「う…ひ…いう…ゼロ…！」

其処に残された…残り香を、温もりを、全身で感じたいが為に

少女は崩れ墜ちる。涙の音をさせながらに

熱いモノが瞳から溢れ…頬から垂れ落ち、シートへと染みを作る様を

弛緩した身体を放り投げた体勢。横顔から瞳を動かして、呆けたままに見つめる

「ゼ…ろ…」

言葉を紡ぎ、息を吐き吸う

鼻腔が感知する。その――

「ゼロおお……」

匂いを

まるで…幼子が親を求める姿で

掛け布団を抱き寄せる。硬く握り締めて手放せないように

枕へと顔を埋め込む。半分ほど顔が埋まるくらいに乱暴に

最早、亦菲の露出した顔の部分は全体の三分の一ぐらい残っていたら

良い方で、首から下は抱き寄せた布団に毛布に…全身で包まり

襲い掛かる恐怖に身を震わせる。正しく…幼子の姿

打ち震える。己の中で渦巻く感情が自己抑制出来ない

ただ、彼女は――

「ぜ…ろおおお…！」

叫ぶ。遠い記憶を掘り起こす

“この世界”の原初の思い出

初めての恐怖。父と母との今生の別れとなった時を

壊されたビルの屋上。闘士級12体

人生初の死の間際に立った己を――

救い上げた。青き亡霊“ゲシュペンストMK—?”

その鋼鉄の巨人を操る…青年こそが

「あい…たい…よお…!!」

黒髪に機械仕掛けの金色の瞳

幼き頃に見上げた。優しい慈しみを抱いた…見る者を安らかにせんとする笑顔

それを浮かべる青年こそが——“この世界”の崔亦菲の始まりであるからこそ

視線が彷徨う

必然的に亦菲の視線がソレに止まる

クローゼット。背広掛けに掛けられた黒衣のマント

その横の台座に置かれた……仮面。立てかけに掛けられた反逆者の仮面

足が自然と動き出す。緩慢にだが、包まる掛け布団を引き摺りながらに

着実に、一步一步…前へと投げ出すように近づく

辿り着く。ゆっくりと…指先がマントへと手を伸ばす

抱き寄せる。胸元にギュッと、顔を寄せて…大きく肺を動かす

鼻先を漆黒に染まったマントに押し付けて、暖かい液体を瞳から流して

崩れ落ちる。仮面が乗る台座に縋りつきながらに

崩れ折る身体が齎した振動によって、仮面と――

「あっ……」

其処に乗っていた……オイルライターとハードケースのタバコ

それらが衝撃で床へと音を立てて落ち、亦菲の視線を向けさせる

緩慢な仕草で、這うように手を伸ばして拾い上げる

微かな間。呆然とそれらを見つめた後

一本程度しか消費されてない。真新しいハードケース

愚者がやる様に……人差し指で箱を軽く何度か叩く

追い出されるようにせり上がる一本を抜き出し

亦菲はタバコを持つ左手とは反対の右手でジッポを開ける

火打石フリントを降ろす。ゆっくりと

「つきなさ……い……よ……!」

力の籠らない右手。震える手で：何度も、何度も降ろして

共に眠った： “あの時” の姿を思い出しながらに

やっとのことで火をつける。揺らめく火の向こうに想いを馳せて

タバコを左手に持った一本を右手の火へと

しかし――

「つい：て、よ！ ついてよおお……！！」

彼女は知らない。知ることなどある訳が無い

未だ、二十歳にも満たない年で：娯楽品とは殆ど縁の無い世界

ほんの少しの者だけに許された嗜好品の使い方など：

口に含む。火をタバコを介して吸うようにしなければ――

「うあっああっああ……！！」

火はつかない

……まるで、誰かの未来を暗示する結末に終わった

ソレを叩きつけて、咽び泣くしか、できなかった：

―帝都 座敷牢

こちらにも…また、時間は冥夜達が“鋼鉄の餓狼”ベ―オ・ウルフに襲撃される

微か前へと遡り――

「
」

ただ、静かに畳の上で御座をかいて呼吸法を用いるは

斑鳩栄司。国を憂う気持ちは悠陽と同じなれど…道が重なることなく

決裂した為に…現状はこの場に身を置く男

囚人服とは縁がある筈もなく、彼は自室に似せて作られた…ただ唯一違うのは格子で取り囲まれる部屋にて

静かに、過していた――

前触れもなく…彼の部屋を囲っていた監視役兼護衛役の兵士達が次々と

「……………」

倒れいく中でも、平然と――

脛が上がることも、身動きをすることも、些かの“動”と呼ばれるような動きを見せないまでも

「…今更、敗者に用がある者は居らぬはずだが？」

近づく二つの鼓動は正確に把握していた

その二つの内の一つが…

「香月夕呼」

名を呼ぶ。呼びながらに瞳を開けると目の前に立つは

“極東の魔女”にして女狐と称される。天才の名を欲しい俤にする美女が立っており

「まあ、私も出来れば…閣下とはお会いしたくはないんですがね」
あたし

斑鳩の素っ気無い声音に感じることなど何もないまま

“何時でも構えていた余裕のある笑み”を携え

藍色の強化服姿で夕呼はそう告げる。何一つ…気負うことなく、自然体のままに

「…酔狂の虫が騒いだか？何時から、衛士に鞍替えした。末席にも加われそうにない醜い身体で」

醜い身体。決して、夕呼のプロポーションは崩れておらず

その美貌にそのプロポーションが掛け合わされれば…下手な女優程度では裸足で逃げ出すしかないぐらいの物であり

得てして、その言葉が指す意味は

「お生憎様。誰が好き好んで戦術機なんか振り回しますか…：必要だから着てるだけよ。私の武器は此処だから」

呆れたような表情で、一番最初はおざなりにも敬う言葉遣いで持って答えたというのに

速攻で素の口調に戻る夕呼。脳味噌を人差し指で指しながら、それに気分を害すのも馬鹿らしいという表情で

「で、何用だ？貴様も私と同様、敗者であろう？大人しく引っ込んでおれ」

斑鳩は捨てるように言葉を放つも

「残念。私はまだ…：負けてないし」

頤に人差し指を当てて

「そもそも、勝負なんてしてないわよ」

「…：気でも狂ったか？」

「狂ったね…ま、狂ってた。という表現は当て嵌まるかもしれない

けど」

斑鳩の哀れみのような眼差しを何処吹く風と散らして

「私^{あたし}とアイツの目的は同じ。手段が変わったところで…」

肩を窄めて、なんとはなしに告げる

「求める結果が得られるならば、過程はどうでもいい。私^{あたし}にはね。そこら辺を勘違いした…」

過程に。己の手が生み出したモノでなければいけないと、叫ぶ女なんかではない

あるもの全て。使えるものは何だって使う。目的の為ならば

目的が達成できるなら、名誉なんぞ犬にでも喰わせておけという女のだから

「アナグラム野郎には…お礼をしないと…ねえ」

だからこそ——瞳の奥が憤怒に揺れる。己の本質を、己を捻じ曲げられたという事実

歯が鳴る。噛み砕かんとするまでに顔を歪めるも

「博士…」

「……そうね。時間を浪費する訳にはいかないわね——奴らも、動き出す」

隣に立つはビルトラプター・シュナベールを操っていた者

「お願いできるかしら？ 社」

「はい。博士」

その女性が夕呼の呼びかけに微かに首を縦に振って頷く

社と呼ばれた女性は斑鳩が座す牢の鍵を解錠し、扉を開ける

「……………どういう、つもりだ」

長い沈黙の後に抑揚を欠いた言葉が…微かに響くように洩れ出る

社と呼ばれた女性が扉を開け放ち、優に一分以上の沈黙を保った後での問いかけに故に

その言葉の奥に潜む感情が激しさを伴っているのは手に取るように分かる夕呼は

「どうもこうもないわよ。あたし私は私の目的の為にやってるだけ……まあ、私の思惑通りに事が進むとは」

肩にかけていたバッグの中から斑鳩の強化装備を取り出して、牢の中へと放り投げる

「ほぼ、思っていないけどね。打てる手は打っておくというだけよ」

夕呼の言葉に続けて、背後に控えるように佇む社と呼ばれた女性が

網膜投影に映る状況を淡々と告げる

「博士。転移反応を確認しました…第一陣は100程度、なおも増大中です」

「そう。回収はできたし…これ以上は此处に止まっている訳にはいかないわね」

最後に斑鳩を一瞥して、踵を返しながらに

「そうそう。コレは教えておいてあげるわ…」

強化装備の上から詰められたリング状の小さな媒体

そう、知る者が居れば…こう呼ぶであろう——コミュニケーター

其れが作り出す立体型の映像に映るは……帝都中に白い燐光の中から現れる

化け物の醜惡な姿
ファインスト

数体の植物。グリートそして、大量の鎧騎士
ゲミュート

それらが帝都の至る場所に現れていく状況を、斑鳩栄司へと見せ付けて

「どうするかは、閣下ご自身がお決めになってください…」

意地悪い薄い笑みを浮かべ、さらに一枚の紙を斑鳩へと放り投げて

社と呼ばれた女性を伴って夕呼は場から離れる

背後から呻きような低い声音が洩れるのと…何かがぶつかり合った轟音が響くのを耳にしながらに

「社。回収物を」

「はい」

夕呼の言葉に促されて取り出した物は、霧の小さな正方形の箱に収められた

「コレが本当にアイツに意味ある訳？」

「“あの人”は、残光です。ですが…其処にある想いを触媒とすれば、必ず——」

「そう…」

胡散臭そうな眼差しで…社と呼ばれた女性が後生大事に持つは

“皆琉神威”の鍰

―帝都　中庭

そんなやり取りがあつたからこそ…斑鳩栄司は此処に立っており

足が軋む

鋼鉄の巨人が二機

一機は……城内に居る。双子の姉妹を守るように

摺り足を取らせつつ、その四足の爪状になった足先を滑らせつつに

やや下方気味の正眼の構えで74式近接戦闘長刀を持つ

両のマニピレーターを青白い光に照らし出される斑鳩は

微かずつの修正でもって…静かに構えさせる。コクピット内が

冬の外気も手伝って、微かに呼気を白い煙に変えながら

鉄とギアとモーター。簡易的に仕分けると鉄の巨人、戦術機を構成する鉄達に無用な音を立てさせないままに

対する“ベリオ・ウルフ鋼鉄の餓狼”は

押し遣られた先に打ち付けたリボルビング・ステークを引き上げ

向きを斑鳩が操る。青の“武御雷”へと…カブト虫と揶揄される頭部モジュールをそちらへと先に向けて

ゆっくりと機体自身を其方へと向ける中

——…構成部位から察するに、有人。と、思われ…か

対する機体の全体をつぶさに頭に叩き入れながら

——獲物は杭打機^{ステーキ}。三連装の機関砲。

蒼い鋼鉄。両のマニピレーター^{ステーキ}の腕部搭載された二つの武装を瞬さし

——杭打ちは、間合いが短く、範囲も極小。その形状ゆえに…打ち抜く程度にしか使えんが…威力は馬鹿にできないな

リボルビング・ステークへと視線を更に向けて

——後部に乗る…弾倉。アレで…炸薬

リボルバー部分を注視した後

——機関砲は……我が方の36mmより、些か口径が大きいと推測できるが…

三連装マシンキャノンへと今度は視線をやり、訝しげに目元を歪ませて

——世界規格から逸脱している。……騎士団の者か？
デフォルト

思いついた事柄を脳裏に掠めつつ、双子の姉妹の方を見やる

——…ふむ。見当違いか。ならば、何者だ…？

切っ先が揺れ動く。惑わすように、刃を把握させないように

——戦術機。もしくはPTという物、はたまた…更に異なる物か
間合いを見切らせない

——推測の域を出ん。現状では……

だが、そんな事は化け物には意味を為さず
アインスト

——捕らえることもできぬか!!

「斑鳩殿……！」

見上げた戦術機の色合いと纏うカラーリング

外部スピーカーを介して聞こえた声音に直ぐに当たりをつけた冥夜は
呻くように言葉を洩らすも、悠陽へと

「姉上！」

「っ…め、冥夜！無事ですか？！」

「はっ、大事ありません。斑鳩殿の助力でもって」

「斑鳩？！アヤツは牢へと遣った筈…！」

冥夜の言葉に訝しげになるも

「殿下！！冥夜様！！」

「「紅蓮（大将）！」」

怒声にも似た叫びで悠陽と冥夜の前に現れた紅蓮は

「月詠姉妹が付きまする！脱出を…！」

「脱出？！敵は一体ではございませんのですか？！」

紅蓮の表情と“脱出”という言葉に直感的に悠陽は問いただすと

「……帝都内にて、正体不明の人型と植物のような敵が現れまし―

――」

苦渋。散々たる表情を浮かべ、苦い声音にて紅蓮は紡ぐ

「敵の発見を此方は把握することできず…直下の城下内に突如出没
としか言わん現れた方により」

「防衛隊の網は役に立たず、最長…火の海と化すは時間の問題」

悠陽と冥夜が紅蓮の言葉によって、遠くの城下町へと視線を走らせる

何処も彼処も…小さなながらも火の手が無数に上がっており、其れが
紅蓮の言葉の信憑性を語っており

「斯衛スクランブルの即応部隊も上がっておりますが…！」

歯を？み鳴らさんとする苦悶の表情により…あの黒の武御雷で構成
された斯衛軍ですら

「殿下、冥夜様！お早くご準備を…！」

時間稼ぎにしかなくてないと如実に言葉が語る。だからこそ――

「私わたくしに…私わたくしに民を捨てよと！そう言いますか！紅蓮…！」

面を下げ、臣下の礼を取って微動だにしない紅蓮と激化して叫ぶ

心底から分かっている。悠陽は分かっていた

紅蓮が…あの紅蓮醍三郎が――…イの一番にそう告げねばならない

ほどなのだから

最早、黙して語らず面も上げることない紅蓮。ソレに真っ向して対する悠陽の激情の端に乗る一筋の涙

立て続けに襲い掛かる急転直下の事態の推移に冥夜は微かに混乱しつつも――

「紅蓮大将殿」

「冥夜様。我のような無能にそのような言葉は勿体なく」

「……………月詠の二人は？」

「格納庫内にて。冥夜様の御機体も出る準備が整いつつあります」

「分かり申した…。姉上」

「冥夜?! 貴方までも――」

「想いを…汲み取って頂けませんか? 姉上……」

冥夜へと顔を跳ね上げて口論しようとするも、冥夜の窪んだような表情に

悠陽は齒を食いしばって…言葉を塞ぎ止める。立て続けに起こる事態が

自身の感情を荒れ狂わせていると、冷静な部分が己を制御しようとするのを冥夜が手伝っていると

三人の間に沈黙が佇む。外からは斑鳩が操る青の“武御雷”と“鋼^ベ鉄の餓狼”が織り成す

火花飛び散り、激突を繰り返す轟音が三人を包む中を

「……………脱出したとして、どうするのでしょうか？紅蓮」

「はっ！月詠姉妹と共に…騎士団へと、」

「…ゼロ様の騎士団は此処の目と鼻の先でありましょう。ど——」

悠陽が紅蓮の言葉に対して反論しようとするも、脳裏に浮かんだ事項と——

「此方へと参って貰いたのだが……………煌武院殿下」

「佐渡ヶ島の方へと」

沈黙を保っていたPAKが突如として光…音声と映像が飛び出ると同じく

ノルン・マディガンと瓜二つの姿を持つ褐色の肌の女性と紅蓮が言葉告げるのは同タイミング

「……………帝都支部の騎士団へと進路を取って貰いたい。此方に策がある。佐渡ヶ島に築きつつある…」

三者共に被ってしまった故に…強引にノルンが先手を打って

「蓬莱島の再来へと渡る為であり…これからの戦いなくてはならない物がある」

「蓬莱島の再来……？」

ノルンの言葉に冥夜が訝しげに呟くと

「ふふ……ソレを問いたいと言うのなら、佐渡ヶ島へと来ていた
だこうか」

幻影の彼女は含み笑いを上げて告げると姿が消えた。PAKの光が
消え失せる

「お待ちなさい?!……消えましたか……」

「姉上……」

PAKを見つめつる二人の内、冥夜が悠陽と声をかける

「…紅蓮。民の脱出は」

「はっ！現状、敵の手がもつとも薄い北西の凱旋門にて集結させつ
つあります」

悠陽に請われてことに対して問いを返しつつも、次に出る言葉を確
信している紅蓮は

「では、^{わたくし}私が」「では、私が!！」

「為りませぬ!!その役目は老い耄れが――」

遮るも――

「貴様ら、三人。とっと行かぬか!!」

青の“武御雷”に乗る斑鳩が雷鳴にも似た怒声を発して

「役目は私が負う!! 早く行けええ!!」

押し込まれつつあった体勢

“ペーオ・ウルフ鋼鉄の餓狼”がリボルビング・ステーキを突き出して押し込む

――やはり、その肩のデカブツは…ブースター加速器か…!

そんな些細な事を脳裏に走らせながらも、長刀の刃先からステーキの先端を掬い上げるように

逸らして、機体その物の方向を変えつつ“武御雷”に姿勢を低くさせて潜り抜かせる

「煌武院悠陽!! 貴様は私に勝ち、未来を担うと選択したのであるう!」

その微かな間に行われた熟達技の代償として、長刀に切っ先に罅が入る

スーパーカーボン製。BETAの外骨格すら切り裂く74式近接戦

闘長刀を傷物にした

“鋼鉄の餓狼”ベୀオ・ウルフへと向き直りつつ

「ゼロと共に！未来を担うと、為れば敗者が勝者の礎になるのは必定！」

「斑鳩……！」

「ゆけえ！我らの愛しき民に、これ以上の苦難を味あわせるな！」

吼える。吠え猛る。轟かせる

その武士の叫び。……何も言い残すとはせずも

紅蓮も悠陽も、そして――

踵を返し、脱兎の如くに駆け出した冥夜の相貌と背は…男へと何かを――

「命運は尽きておる。だが――」

冥夜達が走り出したのを網膜投影の隅にて確認しつつ

「それが、どうした？」

「ペーオ・ウルフ鋼鉄の餓狼」へと向き合う

機体のステータスはその殆どが…イエロー準危険域

特に、機体の間接部は等はほぼレッドゾーン危険域へと突入

機体の外装自体には軽度の損傷程度だが…上辺だけの取り繕い
しか為らず

「此処に居るは、亡霊。そう、亡霊だ。戦いに敗れた残光でしかない」

“武御雷”のマニピレーターの人指、人指をざわつかせるように
動かして、再度…長刀を握りこませる

切っ先を水平に、先端が“ペーオ・ウルフ鋼鉄の餓狼”へと向くように突きの構え

「今、しばらく付き合ってもらおうか？」

想い帰す。人生を

「我が、生き様に」

想いは炎に消えて

――城内　格納庫

このコクピットに収まるのは片手で数えられる

そうして……そのいずれにおいても彼女は――

――気が引き締まるのは常の事。なのに……

御剣冥夜は全身を張り詰めていく精神と

適度な力が漲る肉体の狭間で感じる

――誰かに……いや、誰かが見る視界が重なって感じるのは

戦術機と同じコクピット内装。“XMO”を搭載された

この機体。特機、グルンガスト零式に強化装備を繋げた瞬間

ほんの刹那の時間、気のせいだと思えるぐらいの微かな時の中で

垣間見る。網膜投影に映ったその光景を思う

――貴方も――

墜落していく戦艦。冥夜自身

空を翔る戦艦等はユーチャリスしか見たことなくも

その艦……聖十字軍の紋章とDCと描かれた文字が乗る艦の艦橋から降り行く自身へと長めのソバージュ。白色に近い緑色の髪が特徴の女性が

ゆっくりと柔らかな敬礼を送り続けながら……爆煙の中に姿を消していく様を

ただ、ひたすらに眼に焼き付けんとする者の意思が――

「冥夜……？」

共に搭乗する姉。悠陽が冥夜へと声をかける

「……大事無いです。姉上」

返答しながらに網膜投影、そして計器類へと視線を促す

「やはり、私も武御雷に」
わたくし

将軍専用の紫紺の強化装備に身を包む悠陽が洩らした言葉は

データ・リンク越しに洩れ聞こえる故に

二機の紅の“武御雷”に乗る各々から

「殿下。残っている機は皆、黒のみでございます……以下に緊急事態と言えど、殿下ご自身がソレに乗るは悪戯に将兵に不安を抱かせます」

冥夜の付き人には真那が居るように悠陽には真耶が居り、現状：月詠しまい従姉妹の二人が揃っており

真耶が言わんとする言葉を

「更に、申し難い事ではありますが…殿下自身の御搭乗時間が限りなく少ないものであります」

真那が引き継いで告げ

「引き換え…冥夜様が御搭乗される黒の騎士団から冥夜様直々に送られた機体」

「“武御雷”を圧倒できる力を持つ零式なれば…お二方がお乗りになられているとあれば、完全なる錦の旗となりえます…」

「……実戦部隊に配属されていた冥夜に腕が劣るは自覚しておりますが…歯痒いものですね」

「「平にご容赦くださいませ…御身を考えればのこと故に」」

悠陽が告げられた言葉に小さく臍を？む

答えていた月詠従姉妹は声を揃えて、徹頭徹尾で臣下の礼を取り

「真那。姉上の武御雷は…？」

話に出てきた悠陽が自身へと送ってきた紫の“武御雷”へと振られたので冥夜は問うと

「神代、巴、戎。三名にて横浜基地で御機体を守護しております」

「……そうか」

真耶の答えに冥夜は頷き、少々顔を曇らせる

「冥夜。気にしないことです。私は貴女に託した事を後悔するよう
なことはありませんよ」

悠陽は曇ってしまった冥夜へとすぐさま言葉をかけるも

「…ですが」

結果的に見れば、世界最高の部品で組み上げられた至高の“武御雷”は横浜基地でただ佇んでいるだけ

自身は“愚者”から託されたこの機体に取り込み。悠陽の気遣いを踏みにじったと感じてしまう部分もある故に

言葉を洩らすも

「どういう経緯になろうとも…私は“武御雷”が私の手元に帰って
こなかった事に胸を撫で下ろしております」

「姉上…」

「何処かで…思っておりまして。冥夜は私^{わたくし}を唾棄している…と」

それは日の光の下で生きることを許された悠陽だからこそ

影で生きることを強いられたと思っていたからこそ

光と闇。陽と冥。二つに分かたれたが故に――

「そんな事はありません!! 私^{わたし}は、姉上を――?!

悠陽が告げた言葉に即座に反論しようとするも、悠陽は人差し指を優しく冥夜の唇へと置き

「冥夜が…心底、そう思ってくれていると、今では分かります。ですが…」

今度は悠陽の面に影が差す

「ですが、ゼロ様が冥夜と共に過せる日々を贈ってくださるまでの私^{わたくし}には…知る事が出来なかった事」

人差し指をゆっくりとずらしていき冥夜の頬を掌で撫でながら

「弱く、力が無く…ただ、嘆くしかなかった日々。脆弱な私^{わたくし}の心は」

「姉上!! 気をしっかりと!!」

少々、虚ろになっていく瞳の前に冥夜は叫ぶ

傍に控える二人の月詠。真耶も真那も、言葉を成す事は無くも冥夜

に負けず劣らずの心配げな表情で悠陽を見つめる中

「わた——」

微か二文字。まだ、主語も告げていない。だが——その暗く沈んだ瞳を見据えていた冥夜には…

澄んだ音が響く。頬を打つ音、強く打ち放つモノでなかったものの

「あっ…」

呆然と悠陽は冥夜を見つめる。心を強烈に揺り動かす一撃

「しっかりしてください、姉上……!」

瞳を潤ませながらに冥夜は

「何の為に……少佐は私達に言葉を遺してくださいだったのですか?!」

「めいや…」

「私は、私は生きます。あの方の言葉を受け取ったのだから」

任官式。共に居た仲間達全てが受け取った言葉

「果て無き何かへと——手を伸ばすあの方が」

力強い言葉と月明かりを浴びて浮かび上がる漆黒の姿が脳裏に焼け付いているからこそ

——「私か？……未来を変えるため……だな」

——「未来……ですか？」

——「ああ、未来だ」

明日へと、未来へと手を伸ばしていた“愚者”が

冥夜という存在に焼きついてるからこそ

「求めた物を勝ち取る為に——私は“生^い・行”きます。」

——御剣冥夜は

轟音が響く。格納庫の扉へと何かがぶち当たり

——此処に完全に

扉とぶつかった何か——黒の“武御雷”が自身を構成するパーツを撒き散らしながらに

すべりやって来た外へと、強い眼差しで見据える

——恋を知り、愛に殉じることを

化け物共が蔓延^{アインスト}る帝都へと

——胸に刻んだ

グルンガスト零式の拳を飛ぶ

「これが、私の――戦いだ!!」

「私は断じて、認めんぞ」

三機のデータ・リンクを外部から遮断しながら

自身の“武御雷”と同じカラーリング。紅を操る従姉妹がぼやく

常日頃から……険しいと言われる相貌を

「悠陽様と冥夜様ご自身が決められたことだ。我らが口出すべきでは無かろうに」

更に三白眼にして、呻くように告げた真那へと

呆れ気味に真那は答える。データ・リンク越しに聞こえてくる

「……ほほ、流石は私の妹^{わたくし}。想う方が同じなのは僥倖と云えども…」

「……あ、姉上?!」

一転した声音で冥夜へと底冷えしそうな瞳を光らせる様を

険しい表情で打ち倒したアインストから思わず視線を外して、後ろへと振り返る

そのようなやり取りを――姉妹のほんの微かなじゃれあいを見るべきではないと切り

「やはり、冥夜様の肩肘を察しておられたか……」

真那が流れた映像から表面上とは別の思惑を察して言葉にするも

「であるな。しかし……半分は本心と謂うべきだろう」

真那が冥夜の心根を理解できるのと同じで…真那は悠陽のモノを理解する

そう告げた真那の言葉に仏頂面を表すも――否定することなく、真那は“武御雷”のフットペダルをゆっくりと押し倒す

歩行を開始する真那の“武御雷”。飛び込んできた黒の“武御雷”の様子からして

周りを囲っている可能性がある故に、抜き差しの如くに摺り足を“武御雷”に取らせる中

「……楔を打ちながら、果てるとは…度し難い奴め」

その動作の合間にあった沈黙を破って、淡々と真那は告げ

「楔…か。謂いて妙であるが、な。——ソレを楔と想うは真にお二方の意思」

データ・リンク内に映る双子の姉妹を優しく見つめつつに洩らす

「真那。お前はえらく少佐を目の敵にしているな？」

「む…！そ、そんな——」

「冥夜様を盗られるとでも思ったか？それとも——」

ほんの少しだけ唇の端を皮肉げに歪む。愉快そうに

「ああいうのが趣味か？」

「ばっ…?!断じて、違う!!!!誰があんな趣味の悪い格好をしている奴を！」

激化する。それはもう頬を染め上げて、三白眼より一層と険しくさせて

マシンガンのような勢いでもって断固として否定する真那に対して

「そうか。私は少し興味があるがな」

「?!?!?!ま、真耶…き、貴様…」

「別に、そういう意味ではない。まあ、何処かの誰かはそう受け取ったようだが——」

「ぐっ…」

淡々とした声音であっけなく言い切った真耶に対して、驚愕の表情を浮かべる真那を

したり顔にてサラリとあしらい

「悠陽様と冥夜様の想い人。臣下の私が想うには、些か不義であるう」

「なら、紛らわしい言い方をするな!!」

「勘違いしたのはお前だろう」

「ぐうう…! お前のそういう所は、私は好まん!」

「姿は瓜二つであるが…そこら辺が我らが従姉妹である理由かもしれないな」

仲むつまじい悠陽と冥夜を見据えながらに――

今この時、戦場へと足を踏み出す前の一時の戯れに浸る二人を

通常の軍のブリーフィングや出撃前によく見られる…:よく言えば武者震い

途惑いは恐怖による震え、恐れを薙ぎ払う為の日常の埋没を起こすやり取り

真耶のその言葉に、真那もデータリンク越しに二人を優しく見つめ

二人の従姉妹が口を閉ざした時

「では、参ろうか月詠」「参りましょう。真耶さん」

寸分違わずに告げる。双子は相貌を引き締め、眼に決意を秘めて

ただ、静かにグルンガスト零式の主機が完全に目覚める微かな時を
有意義な一時へと変えていた

二人の告げた言葉には言霊が乗っており

「「御意」」

従姉妹はブレることなく言葉を重ねて飛び出した

最初に視界に映り、緊急発進スクランブルを駆けた斯衛軍のデータ・リンクに繋
いだ三機の通信機に

「うあつあああつあああ！！！！！！」

盛大な男の悲鳴と、彼女達は名を知るよしはないが……外見からは
鎧騎士と見て取れる

アインスト・ゲミュート

「なんと、面妖な……！！」

冥夜の呻く声音が四人の言葉を代弁しており

その奇怪な動き。全身を包む鎧が四方八方に散らばったと思った瞬間には

黒の“武御雷”へと一個一個のパーツとなって突撃をかけて

「お、押しつぶされる!!」

悲鳴を上げた男の諦めたような声音

盛大な装甲を叩く音がコクピット内にも朝焼けに燃ゆる帝都の街並みの中にも響く

近くに居る冥夜、悠陽、真那、真耶の四人にも黒の“武御雷”自身が悲鳴を上げているような装甲の破碎音は届いており

「冥夜!!」

「…駄目です、姉上…!あの者はもう…!」

悠陽の悲鳴のような声音に答える冥夜も、また辛酸を耐える苦痛の呻きのように返す

零式の武装では…ガッチリと体内に納めるように鎧を模っただけのパーツを滅するは簡単であれど

中に囚われている“武御雷”ごとであることを明白

真那も真耶も瞬時に理解しており、最早割り切って全周囲警戒に注力しており

「…そ、そこに居られるは將軍殿下と妹君であられますか？」

データ・リンク越しに本来ならコクピット内映像も届けられる筈であるが…黒の“武御雷”の損傷状態から

映像はサウンド・オンリーという名の砂嵐で持って届けられる。死の間際の幸運とでも云うかのごとくに

「脱出なさいませー!!」

「…殿下と妹君に看取られて逝けるとは今生の名誉の極み。感謝いたします」

死の間際。最早、男は己が潰えることは解りきっている――だと
いうに、先ほどもまでは打って違って澄んだ声音で

ゆっくりと言葉を紡ぐ

「……遺す言葉はあるか？」

冥夜が簡易後部座席から身を乗り出している悠陽の肩を背凭れへと
手をやって

悠陽の手をとって諭しながらに言葉を問い質す

「辞世の句、ですか……生憎と自分は武家出身ではない身でして…
情けない話。学がありません」

手に取るように状況が鮮明に脳裏に浮かぶ。二人共に、冥夜と悠陽は共に

声音からして年若いのだろう。苦笑を顔に乗せて迫る死の恐怖に懸命に抗っているのだらうと

ほんの少しの沈黙、言葉の。なれど…無粋な化け物が装甲を少しずつ咀嚼していくように削り取る盛大な音が耳障りに響くも

沈黙が破られる。言葉を見つけたのであらう

ゆっくりと噛み砕くように、飲み込むように

「弟が居るんです」

「「「……」」」

「まだ…徴兵年齢に達しておりませんが——」

諸行無常。完全なる無常。暇を与えなかった化け物は——アインスト・ゲミュートは

少しずつ、少しずつ咀嚼していたというのに……データを取り終えたのか、飲み干せるようになったのか、飽きたのか

男が言葉を紡ごうとするも——情け容赦なく遺す言葉を砕く

「き…さ、まあ……!」

頭の冷静な部分では意味の無い猛りと分かっている

眼前に立つ正体不明の存在。冥夜達の認識上ではBETAの新種と
思われているアインスト・ゲミュート

BETAに風情というものを問うこと事態がナンセンスというモノ
であるも……感情が納得するわけが無い

データ・リンクにて繋がっていた筈の画面は……識別信号喪失

シグナルロスト

黒の“武御雷”を体内に納めたゲミュート。無機質なツインアイが
光り冥夜達へと頭部モジュールを向けるも

噴射拳。ブーストナックルの一撃を受けて粉微塵と化す。間髪入れ
ず、存在を許さんばかりに

四人の間に沈黙が横たわる。三秒ほどの黙禱の沈黙の後

「……真耶さん。紅蓮からの連絡は？」

気丈に振舞う。最早、戦場に一度出れば征夷大將軍という地位を持
つ者に相応しい姿を示し続けねばならない

悠陽は淡々と問おうとするも……表情には先程の事が浮かび上がって
いたが――

「15分。集められる民草を伴って脱出するとの事です」

真耶は告げることなく、網膜投影に映っていた紅蓮からのメッセー
ジを読み上げる

「15分のみ…ですか」

「はっ。それ以上は…増援——真那！冥夜様！」

言葉を紡ごうとした真耶であるが視界の端に捕らえた。緩慢な動きなれどゲミュートが三機程

此方へと気づき、接近してくるのを察知。声を上げると同時に87式突撃砲。その36mのチェーングンの砲口から

弾丸を吐き出させつつ機体を

「はあああ！」

前方を74式近接戦闘長刀の切っ先を地面擦れ擦れまでに下ろして、左右の腰にある一組の跳躍ユニットを点火しつつ地を滑るように

駆け出した真那の機体。その真那の“武御雷”の装甲を削るか削らないかの微細な射撃でもって援護する真耶の機体も真那に続くように奔るも——

「削ることすらできないだど?!」

一番接近しているゲミュートへと集中的に弾丸を浴びせているにも関わらず

その鎧に傷をつけることが出来ない事実。兆弾と化している36mに葉を？み鳴らすも

「水先案内は出来ている！真耶！」

そう言いきって、真那は一機のゲミュートの懷に飛び込み。一気に袈裟上げで切り込むも――

「っあ?!」

切り裂き始めは入ったものの…中身の無い感触とその装甲の頑強さ故に

「っちい…！」

斬り上げた74式近接戦闘長刀を振り抜く事無く、胴体全体の五分の一も斬り上げられていない位置から

長刀を外しながら―ゲミュートの装甲表面を滑るように―長刀の軌道を強引に変えつつ、リーダー内に光線級が居ないのを瞬時に確認して

浅く跳ぶ。長刀が辿る軌跡をなぞるように跳躍ユニットを吹かせ、ゲミュートの肩を台座にして蹴り跳ぶ

中空へと上がった真那は即座に機体側に送られてきた長刀の現状を精査して、一瞬で破棄を決断

担架に載せられていた長刀の予備を捨てた長刀を持っていたマニユピレーターに持たせつつ

もう片方の担架に載せられた零零式突撃砲を腰部へと担架ごと回して、至近距離から36mを放つ

「ふん……あの男の御節介が活きたか」

舞いながらに次々と指示を出し、実行する自身の“武御雷”に満足しながらも

多少、面白くなさそうにポツリと呟く。通常の“武御雷”では成しえない機動を取りながらに

「真耶！！此方の突撃砲は有効だ！若干、射程を短くせねばなるまいが…効かんよりかはマシであろう！」

担架から突撃砲を切り離して、後続の真耶へと放る

「話には聞いていたが奇怪な動き。が…それ故に有効だな。新型の突撃砲もかなりの強化を施されている…！」

受け取った突撃砲から送られて来る詳細を網膜投影に映して流し読みしながらに放つ真耶

第16斯衛大隊に所属していた真那である為…機体に未だ“XMO”が積まれていない。故に、感嘆に満ちる声音で淡々と言葉にする

「長刀は表面を深く削ることに集中すれ——?!」

イエロー レーザーポイント
警告。光線照射中。クラス1

機体内に走った警告の段階で、真那は機体を我武者羅に落とす。警報が止み

地に無事に足を着けられたことを吐息を微かに洩らした後

「……クラス——」

また、言葉の途中を遮るように紅い粒子が直前まで真那の“武御雷”が居た中空を薙ぎ払う

レーザー、熱線など比較にならない程のエネルギーを宿した一線。ソレを認識して

「あの…植物みたいな奴は光線級と同種という事か……！」

戦域に繋がるデータ・リンクからは一度も先の——アインスト。グリートのハイストレーネを打たれたという情報は無く

四人が目視し、取り分け

「…零式にて識別できた。一体、少佐は……！」

——予見していたという事ですか…！ゼロ様…

二人の網膜投影に“XMO”から取り出された情報源。TC—OSを元にしたが故に

戦闘記録から割り出された敵の正体。……最初期、ノルンが用意したゲシュペンストMK—？から作り出されたOSの中に

そのデータが入っているという事実を“愚者”が知る由も無いが

「識別名称、アインスト・グリート。通称、クラス——」

そうして、冥夜が言葉にしながらもデータ・リンク上に情報を共有をかけ

「…射線確保時が照射警戒に引っ掛かってくれたか…」

レーザーと呼ばれる物。光線級が吐き出すソレは熱線であり戦術機に搭載されている

照射警戒機レーザーアラートとはその熱線が最大出力照射までに当たる余熱のような光線を感じして

警告を出すものであり。苦虫を噛み潰したような剣呑な表情で呟く真那に

「逆に言えば…発射を意図しただけで、クラス1レベル程度の余熱を放出しているという事か」

淡々とした声音で答える真耶。頭上を通り過ぎた紅い粒子の線を見上げつつ

「光線級と比較すれば…瞬時に最大出力発射を可能として」

紅。高機動形の“武御雷”であり、真那クラスの衛士だからこそ――

従来の光線級が要する数秒の最大出力までの時間を一秒、二秒程短縮しているグリートのハイストレーネ

その生死を分かつ秒を乗り越えられただけで…

回避できない者達の機体が爆散して果てるのを戦域マップの味方マーカーが減るといふ事実で持って確認する

「連射も可能。ふっ……晒いたくなるぐらいだな」

嘲るようにして自嘲気味の笑みを浮かべながらも、グリートとゲミュートとの交戦データを記録させながらに

真耶は120mmの砲口を真那を狙ったグリートへと向けて放つ

植物のツタが寄り集まったような姿を持つグリート

見た通りに根づいているような、緩慢な動きしか出来ない上にゲミュートとそう対して変わらない大きさ

ありていに言ってしまうば……小型種に紛れ易い光線級よりも遙かに図体がでかく、かつ重光線級と比べても

軟すぎる身体は意図も簡単に吹っ飛ぶ。真那が一撃を入れたゲミュートはその姿から硬いと予想を立てられが

予想以上の固さを……真那が袈裟上げに斬り上げた長刀を微かだけ深く食い込めただけで表面を削るように抜き放ちながらに流したのを

見ていた真耶は見た目の判断だけでは不覚を取ると考えて選択した120mmは過剰攻撃気味であるも

選択としてはベスト。なぜならば……

「なっ?!こやつ、再生しているぞ?!」

真那が直前に斬り傷を負わせたゲミュートの鎧装甲が肉が盛り上がるように装甲が膨れだし塞いでいく姿を

負わせた真那自身が驚愕しながらに言葉を為す

「月詠!!一撃で葬り去るか、連続で叩き込むのが有効そうだ!」

三機の内、一機を担当していた真那へとグルンガスト零式を駆る冥夜が

「もう一度、噴射拳!!」

沈めた一機目同様に、一機目を潰す為に発射した右の左のブーストナックルが戻る前に

右のブーストナックルを放ちながらに叫ぶ

飛び出した大質量の拳の一撃に耐えながらに足を滑らせていくゲミュートであったが…最初の内だけであり

最終的には腹部から自身の大きさの四分の一程の拳が突き刺さり、突き破られて沈黙する

ツインアイから光を無くして——アインストの核たる球状のコアを粉碎されて

「はっ!冥夜様。真耶!」

「委細承知。後は気にするな」

一体目のグリートを沈黙させて、更に隣接するように居るグリートへと120mmを再度放つ

呆気なく倒れるグリートと真那の斬戟の乱舞の前には…いかなゲミュートであれど一対一では手が出る訳も無く

沈黙させることは簡単なれど――

冥夜と真那の機体のみ。警告音と共に

“ボース粒子の増大を確認”

網膜投影に映った文字と同時に更に更に数を増やしていく

「限がありません。冥夜、真耶さん、真那さん。一刻も早く紅蓮と合流を」

「はっ!」 「承知しました。姉上」

白い粒子の輝きと共に現れる。グリートとゲミュートが倒した数よりも多く出現するのを

目の当たりにした悠陽は断言する。苦味きつた眼差しを持ちながらに

燃ゆる帝都は明けたばかりである――

燃えよ斬艦刀

―ユーチャリス 展望台

「つよいね。水月は」

ポツリと洩らされた遙の呟きに

背を向けていた水月は振り返る事無く

前方の虹色とも呼べそうな様々な色合いを見せる空間へと

視線を放り投げながらに

「そんなことはないわよ」

何の気負いも、感情も込めることもなく告げる

「…そうかな」

水月の背へとベンチに座りながらに視線を送る遙

その視界はボヤけており……

「……………茜」

水月が言葉にした名に肩が震える。一際大きく揺れ、小刻みに震え

が続く

……暫しの時、沈黙が二人の間に広がる

水月は変わらず遙へと背を向け続ける。左の二の腕に手をやって自身を抱えるような立ち姿で

遙も変わらず水月へと視線を向け続ける。変わらず——いや、視界はより酷く歪みつつ膝を抱えて

心地よい沈黙。そんなものではなく

互いが互いに……言葉を成すのが重い。だが、しかし——

「お姉ちゃん、失格、だね……」

「なに、言ってるの……?」

瞼を落として遙が告げた言葉に

水月は心臓が竦み上がるような冷たいモノを感じ、呆然とした声音で言葉が洩れ

「茜だけ……私だって——」

甲高く、澄んだ高い音が響く。頬を打つ音が

平手で思い切り振りぬいた水月へと焦点の合わない瞳で

跳ね飛ばされた頭を動かしボンヤリと水月へと向き直る

「遙…アンタ…!!」

眼差しを強く持って望むも——その表情と瞳に……何も言えなくなってしまう

またも、沈黙が降りようとするも

「……分かってる。水月が言いたい事くらい分かってる。ずっと、一緒だったんだから」

「けどね。…けど、それでも……孝之君も、茜も…」

言葉にし続ける事ができなくなっていく。洩れ出る涙音るいが塞き止める

「遙……」

覚悟を、決意を決める戦乙女も居れば…

迷い、傷つき、揺れる戦乙女として居る…

—帝都

視線がソレに向かう

原色系の強い黄色と黒。それが規則正しく斜めに互い違いに並び

余程の衝撃を——拳を振り下ろして叩き割るようにしないと割れそうに無い強化ガラスに覆われた

赤いボタンが鎮座する四角い箱。日本製戦術機の大半がコクピット内に設置している装備

瞳が、その通常時ならば光が灯ることの無い——ある装備を懐に設置しない限りは光らない筈のソレが確りと灯っている事を

再度確認しながらに

撓らせる。男——

「頭部を狙ええい！！赤い球体を殺れば、“鎧”は沈黙できる！！
“蔦”は光線^{ビーム}の発射口の赤い奴じゃああ！！」

紅蓮醜三郎。日本帝国軍、大将を勤める四十過ぎの男が発する激のような言葉と

彼の“武御雷”だけが持つ。オーダーメイド特注装備兵装

“蜻蛉切”日本三大名槍の一角。その名を与えられた戦術機用の槍

「奔れええい！！蜻蛉切い！」

眼前に阻む三体のゲミュート。内一体が装甲をバラけさせようとするも

撓る。奔りながらに撓る

紅蓮が搭乗する“武御雷”のマニピレーター

右のマニピレーターが持つ槍の柄。左手に相当するマニピレーターその手首の付け根と呼ぶべき部分に

紅蓮機のみには備え付けられた円状の輪。何かを通すように……総じて紅蓮の主兵装たる“蜻蛉切”の一撃を

三撃程へと魔術のように手数を増やす機構

よく撓る鉄鋼物によって鍛え上げられた柄の部分。刃に当て嵌まる穂先の軽く四倍はある長さ

ソレを輪の中へと差し入れて、暴れさせれば――

分離寸前のゲミュートの頭部モジュールへと輪の中を真っ直ぐへと通した一撃が突き刺さり沈黙

突き刺した手応えが槍越しに伝わりだした瞬間には

槍が暴れる

狭い輪を通っている槍。それを持つ右のマニピレーターを素早く振るう

必然的に――輪が邪魔をしているように、撓り易いように作られた“蜻蛉切”の柄は

大きく輪の中でぶれる。穂先が手元の暴れ具合に比例するかのよう
に穂先は大きく――

討ち取ったゲミュートの背に隠れるように隣接していた二体のゲミ
ュート

暴れ狂おうとする穂先を……老練にして、悠陽の指南役をも務める
帝国きつての武者の技量は

そんな力さえも綺麗に、見惚れるほどに導く。残りのゲミュートの
コアが収納される頭部へと鮮やかに突き刺さる

「ぬふうう……」

息を荒ぶらせるように吐き出して

「民達の収容はまだか?!」

十機ほどの黒と白が混ざる“武御雷”が乱舞する戦場にて、必死に
民間人をトラックなどの運搬車に詰め込むように

誘導する歩兵達に混じって機体無くして手伝っている衛士へとデ
ータ・リンクを介して問いかける

「確認できる範囲でも、どう頑張ったとしても後7、8分は掛かります！…！紅蓮様！！」

「もっと、早く出来んのか？！コレでは何時、民草達に流れ弾が降ってくるや知れんぞ！！」

「精一杯やってます！！しかし、それでも掛かるものは掛かりまする！！」

「ぬうう…！！！」

眼下にて戦火飛び交う最中を、着のみ着のままに逃げ出してきた帝国国民達が軍に従って

必死に車へと乗り込む様を横目にし、そうして眼前に広がる“武御雷”対アインスト。ゲミュート及びグリートと

民間人達との間、正しく一步手前にて壮絶に戦闘を繰り広げる光景を叩き込みながらに

———こうまで…いとも容易く帝都の懷に潜られた時点で……！！

胸中にて吐き捨てながらに迫るゲミュートを“蜻蛉切”で払う

最長、組織だった抵抗など出来やしない。現れた時点で……アインスト達の勝ちが確定している

多くの民間人が座す帝都。將軍の膝元とは…最前線より離れていなければ、国のトップが座す場所が常に危険に晒されるという事態など

どの国に置いてても許されざる状況。それが常となれば、最早――
爆発が起きる。戦術機の主機が起こす…見慣れた爆発

グリートのハイストレーネの直撃を受けた黒の“武御雷”が爆散する。本当に一歩手前の救助地帯にて奮闘していたからこそ

近くに止まっていた車両を巻き込んで…脱落した腕部がその車を叩き潰す

息を呑む声が何人かから洩れる。黒の“武御雷”ですらベテランの領域に居る衛士達の中でも

更に腕が上の者達だけのみが…洩らせる。其れほどまでに――ア
インスト共は…強くあり、状況が最悪すぎる

地獄絵図。ここも、また…地獄絵図へと塗り替えられた

必死に妻と子供を抱えるように手を取って先頭を走る男。一家の長らしく守るべき者の為に先頭を行くからこそ――

―後ろで盛大な爆発が起きた。フツと手に掛かっていた重さが唐突に消えた。右手の重さはまだある。だが…左手が牽いていた最愛の妻は…手だけ残して消えた

呆然となる。呆然となってしかるべき、戦いというものをメディアを通して識^しっている、知らない男は呆けた面を晒すしかなく――

―続く爆発で妻の後を子供と共に追った

―兄妹だろう。必死に幼い妹を鼓舞して走る少年。年の頃は…小学生低年、妹など幼稚園に通う様な年頃であろう

親は何処に居るのだろうか？兄妹達を探して戦火の中を喉が張り裂けんほどに叫びながらに探しているのだろうか？それとも―――“あっち”に居るのだろうか？

それを兄妹は知っているのだろうか？知っているだろう――少年の相貌には悲壮と決意で満たされているのだから……そう、最早、幼き妹を守るのは己しか居ないと顔に書いているのだから

必死に、必死に走る。周りを同じように走る人達の群れの中で。蹴飛ばされ、邪険にされ、それでもなお――

二人して地べたに倒されるも、少年は少年のできる範囲で素早く立ち上がり……手を引く妹へとブレた視界を正すように頭を振って振り返る

手を引いてきた幼き妹が居る方向へと――――アインストの汚染によってヘドロのような緑の肌へと変貌していく妹へと

……結末を記す必要は無いだろう。ただ、あえて記するとするなら互いが離されるという事がなかったという……救いような無い幸福だけ

正しく、地獄絵図

地獄の業火に均しき焰が闘う術を持たぬ者達を容易に駆り立てていく
死の淵へと、命の終幕へと

歯と歯がぶつかり合い軋むような歯軋りが鳴る。噛み鳴らすしかない。？み鳴らすことしかできない

「ぬおおおつつあ！！！」

迸る咆哮。奔る銀閃。一振りが幾多の化け物を屠る

されど——その瞳に映る守るべき者は……零れ落ちていく。櫛の
葉が欠け落ちるが如くに

そうして……一際大きな淡く白い燐光が満ち

「なんて…数だ」

「くそがあああつああ！！！！！」

「押し切られるしか、ないのかああああ！！！！！」

幾つもの悲鳴のような怒声が響き渡る。目の前に現れた存在——
アインストの群れ

第一陣に匹敵しそうなほどの淡い燐光と共に現れる化け物達

「どれだけ、乗り込めた?!」

その群れを認識した瞬間。紅蓮は避難誘導を担当している者へとデータ・リンク越しに怒鳴り散らすように問い

「三割、居るかどうかです！！大将！」

三割。帝都に住まう者達の三十％程だと悲壮な面持ちで吼えるように返す

そのやり取りの合間に現れたアインスト達。ゲミュート達が一斉に行動を開始する

近接している状況。紅蓮以外にも何人かが急な増援に対処するも――

一機は分離したパーツの群れに集られ、機体全体を殴打され大破

一機は鏑迫り合いに為っていた状況を横合いから現れた者に強襲され、コクピットブロックを拳で打ち抜かれ

様々な結末を辿りゆく部下達――

「むあがつあつあ！！発進せい！！今乗っている者達だけでも、脱出させるのだ！！」

BETAとは違い……アインスト共には知性がある。人間と比べれば取るに足らぬものかもしれないが

それでも、紅蓮の機体の脅威を感知し五体ほどが一気に殺到する。迎え撃つように“蜻蛉切り”を振るいながらに

雄叫びを、決断を下す。その言葉に弾かれて問答していた者は輸送車を発進させるも

嘲笑うかの如くに……後方に位置するグリートが、頭部と砲口を兼ねる口から赤い白い粒子を集めだす光景を瞳が捉える

紅蓮の瞳は——苦痛と無念を宿す

一秒か、二秒か……実際の時はソレぐらいだろう。しかし、紅蓮の思考は途轍もなく永い時を刻むかのように

——我が槍……届かずか……！

眼前に迫るゲミュート達へと一閃を飛ばしたが故に

守るべき者を護れないという厳然たる現実を

————斬艦刀が覆す————

「おおっおおおおお！！」

一閃。正しく、この一撃も一閃。一振りの馬鹿げた大太刀が出刃包丁と卑下されることすらあった巨大すぎる太刀が

擦れ違いざまに後方に位置する。グリート

支援型故に、数体が整然と並んでいた為に……その一撃は今にも輸送車を襲おうとする一撃をキャンセルする

発射元たるグリートの群れを纏めて斬り飛ばす。両断された胴体が勢いに負けて中空へと吐瀉物をぶちまけるかのように

散々たる体^{てい}となって肉片へと化した植物の化け物達の上に

両肩後部と背部ユニットから為る大型スラスタ。全方向へと稼動可能なバーニアノズルから盛大な爆炎を吹き散らせながらに

突撃した“グルンガスト零式”は振り抜いた斬艦刀を操って、地面へと突き刺しアスファルトを砕きながらに急制動をかけて止まり

「紅蓮！大事無いか？！」

第一声は悠陽。データ・リンク越しに網膜投影に映る紅蓮へと大和撫子の美貌を

微かに歪ませ、心配げに問う。紅蓮本人の気遣いと民達への気遣いに心が割かれる王のままに

「紅蓮大将！ご無事で……」

続き、冥夜はホッとした様相を一瞬だけ垣間見させるも直ぐに集ってくるゲミュート達へと対応しだし

二機の紅の“武御雷”を操る真那と真耶は友軍を助ける為に二手に分かれて輸送車の近接防御へと

「殿下…！冥夜様…！」

苦痛と無念を宿していた瞳は歓喜を宿して打ち震えるも……憤然とした表情で

「輸送車の発進を決しました！この咎は如何様にも……！！」

「……！！いえ、紅蓮。それは私が背負^{わたくし}うべきものです。お前の判断に間違いはありません…」

周囲の瓦礫と化した街並みと足元に広がる惨劇をつぶさに瞳に、脳裏に焼き付けながらに

「ですが…！」

「お前に咎を背負^{……}う資格など、ありません…！」

「これは…これは私^{わたくし}のみが背負うモノ！出過ぎた真似は控えなさい！」

最長……悠陽の剣幕にただた歯と歯を強く？み合わせるしか出来なくなる紅蓮

己が主君に背負わせるモノを痛切に感じ取りながらに

「姉上」

「冥夜。貴女も貴女の成すべき事を」

「……御意」

振り返る事無く、冥夜は悠陽へと声をかけるも……返ってきたのは
硬質な声音の一言

瞑目し唇を真横に引き締めてゆっくりと冥夜は了承し

「姉上の道筋を阻む者は――」

“グルンガスト零式”が構える。正眼の構えにて斬艦刀をかざしな
がらに

「我が斬艦刀の……露と化せ!!」

燃ゆる帝都の中

護るべき者達の屍の上にて

誰もが、心根を奮わせ

太刀を振るう

燃ゆる帝都を背に

―ユーチャリス 個室

此処にも、また戦乙女が二人

ベッドに腰掛けて中空へと視線をボンヤリとやるは

「……千鶴さん」

「大丈夫よ。珠瀬…ちょっと、お父さんの事とかね…」

榊千鶴。207B訓練小隊の隊長を勤めた少女であり

そんな千鶴を心配げに問いかけるは……極東随一と言っても過言ではない狙撃手。珠瀬壬姫

千鶴の言葉に、不安げに揺れる表情をより一層と揺らめかせるも

言葉をかけることができない壬姫は、そのままに立ち尽くすのみで

「立て続け…ね」

「…千鶴さん？」

ポツリと洩らした千鶴の言葉。伏せてしまったその顔を覗き込みながらに壬姫は問いかけ

「立て続けに……皆、逝ってしまったわ」

「千鶴さん……」

「甲20号作戦で麻倉、高原、築地……茜」

「クーデターではお父さん」

「そして……」

最後まで言葉にする必要は無かった

不意に自身の手に掛かる熱い液体を見れば……誰だってその先に紡ぐ名を分かる

少しだけ顔を浮かせて視界に収まった壬姫。両の掌で一生懸命に流れ落ちる涙を塞ぎ止めんと

決して、涙声を聞かれまいと耐える仲間を……

抱きとめる。肩へと柔らかに手を置いて

「ごめんなさい。少し弱気になってしまったわ……」

「そ、んな、ち、ちづるさん……!」

「誰だって、誰だって……」

肩へと置いた手に力が籠る

壬姫の黒を基調とした在日国連軍の制服がクシャリと悲鳴を上げるも

「いつか、死んでしまうのは分かった筈なのに」

掴まれている本人たる壬姫は何も言えない

そこに浮かぶ表情を目にしてしまったら……何も言えない。言える訳が無い

どれだけ言葉が平静を保っても——18そこらの少女の感情は如実に表に出でてしまうもの…

それが207部隊内一の自制心を持つ榊千鶴であろうとも

「分かってたはず、なの、に…！」

「…千鶴さん…！」

飛び込む。千鶴の胸元に飛び込む壬姫

ただ、為されるがままに腰元に手を回した壬姫の肩へと顔を埋める

——「未来が……見たい、か…」——

室内の天井に設置されたスピーカーから声が放たれる

互いの耳にみちるの声音は届く。互いが互いに導かれるように

天井へと視線を向け設置されたスピーカーから洩れ出る言葉をつぶさに拾い上げていく

——「生きることをあきらめるな」——

みちるの言葉が終わり、次いでまりもの言葉が流れ始め

「足掻いて欲しい。たとえ、どんなに絶望しか見えなくても、周りになんと言われようとも」

それは、かつて……彼女達207訓練部隊の任官式にて聞いた言葉

神宮司まりもと共に聞いた——“愚者”の言葉

「生きること、執着、して…欲しい」

願いの

——死なないでくれ

言の葉

千鶴と壬姫の視線が互いに向く

その瞳に宿された新たな意志を、互いが互いに認識しあう

同質の思いを認め合う。確認しあう

そうして……二人は目元を拭って部屋を出た。決意と覚悟の眼差しを持って

―帝都 凱旋門前

「くっ……！バカの一つ覚えか……！」

二機の紅の“武御雷”の片割れたる真那が呻くように愚痴りながらも長刀を袈裟斬りに振り下ろす。グリートの柔らかな肉体を切り裂き

「単細胞分裂と言ったところか……！」

真那の近接戦闘を支援するように零零式突撃砲を放つ真耶

反動を上手く殺して射線軸がブレないように捌くからこそ

真那の“武御雷”の直ぐ傍を36mmの弾丸の群れは戸惑う事無く突き進む

足元に居る輸送車の群れへと狙いを定めてくる。敵の全体数から見れば二割程度しか居ない

グリート。その数体が此方へと狙いをつける水際にて穿つ。36mmの雨と時折、120mmの花火で持って

「真耶！もう、長刀が持たん！」

兵装担架に積んでいた予備を最初の会合にて抜刀してから使い続けていけば……

グリートの合間に時折、こちらへと迫るデミュートを相手取っていれば至極自明の理

現状が極端な——最悪な撤退戦と為っているが故に、武装の損耗も激しい。それは

「此方もだ……！予備弾薬は装填しているので最後、補充…….間もない！」

真耶と同じ事。突発的なアインストの帝都襲撃

誰も予想できる事ではなく、スクランブル対応した斯衛の一部隊

そうして彼女達の“武御雷”が満足な武装を持って出られただけ錬度が高かった整備兵によって

現状を維持できているとあっても……現実には新たな展開になり始めている

武器弾薬が尽き始め、“武御雷”も無茶な撤退戦故に稼動に余裕を持たせる事などできない

余裕など持たせれば、守るべき者達は一瞬で消し飛ばされるような状況

機体の各部間接が小さくも準危険域^{イエローゾーン}を発し始め

推進剤を筆頭に各種のエネルギーも網膜投影に映る時機のパラメータには残り微かだと告げており

「飛べっええ！！噴射拳！！」

ただ唯一、この場に君臨する。圧倒的な力と核動力が齎す無限とも言えるべき主機を搭載する

「我等の民草達に集るな！化け物風情が！」

冥夜が駆る“グルンガスト零式”が一騎当千の力を持って戦線を維持する。形ばかりの撤退戦を支える

左のブーストナックルをグリートの群れへと叩き込み

殆どのゲミュートが殺到し群れと為す場所へと斬艦刀にて真横に薙ぎ払う

その巨体だからこそ……輸送車は射程外となってしまうているグリートのハイストレーネを一手に引き受ける

D F—ディストーション・フィールドと何層もの対レーザーコーティングを施された重装甲で耐える

——コレだけの数が私の前に集ってくるとは……！

形ばかりの撤退戦。それを為しえている一番の要因は……

——超絶熱戦砲が使えれば……！

接敵しているアインスト共の殆どが、冥夜と悠陽が座する“グルンガスト零式”へと殺到しているからであり

冥夜がそう思うのも……無理からぬが——絶対に彼女は熱戦砲。ハイパーブラスターを使う事はない

否、使えない。胸部装甲の上に乗る仮想砲身を作りだす装置を起動させられない

なぜならば——

「おのれ……！我等の京を好き勝手に、我が物顔でのさばりまして……

！」

簡易後部座席に座す悠陽のくぐもった呻き声から分かるとおりに――撃てないのだ

冥夜にも、悠陽にも、紅蓮にも、真那にも、真耶にも………おおよそ日本帝国軍。いや、日本人には撃てはしない

自らの故郷。この日本帝国の首都であり、將軍の御膝元である帝都を自身の手で焼く事を、破壊する事など

相対するアインスト共が遮二無二に突っ込んでくる。焦りの様な、憎惡の様な、

――いやに……！この化け物達はうなじを震わせる……！

――肌がざわめきますわね……！ただの化け物と判断はつきませんでした……！

生の感情のようなモノを叩きつけ、冥夜と悠陽の身体をざわめかせる

「殿下！冥夜様！」

直衛機^{エレメント}として随伴する紅蓮が二人を呼び

「このままでは、全滅が見え透いております！しからば……お二方だけでも脱出を……！」

“蜻蛉切”を振るいながらに告げた言葉に反射的に

「紅蓮！！！！」

叫ぶように怒鳴り返すも――

「活あつあつあ！！！！！！」

一声にて黙らされる。黙るしなくなる

「お分かりください！！殿下、冥夜様！御二方が生き残らねば……！
誰が、この国を導くと？！」

データ・リンク越しに紅蓮の怒声だけが響く

誰も彼もが沈黙する。紅蓮の言葉以外は突撃砲の銃撃と長刀の斬撃、
ハイストレーネの発射音とゲミュートの攻防の音、爆発音のみが響く
中

「帝都を失い。もはや、榊首相を筆頭とする内閣の殆どを失ってしま
ったこの国！誰が――」

「誰が、日本人を引き行くのでありましょうか？！――御二方
のみしか……居られないのです！！」

吼える。吼えるように懇願する

「責を果されなさいませ！たとえば、この場に居る斯衛者達全てを失
おうとも、この場の民草達を失おうとも――」

「多くの……帝国将兵と民達の為に、生き延びねばなりません！」

「喩え、恥辱に塗れ、汚濁を啜ろうとも——」

「明日^{みらい}を掴む。その日まで！！生き続けなければならんです！」

「出なければ……！散っていた同胞達になんと言って会えばよいのでしょうか……！！」

侍大将は告げる。厳かにして盛大に

データ・リンクで繋がる斯衛の衛士達の誰もが……瞳で頷く。首を縦に振る事も、言葉にすることも無い

だが——この場に居る戦う者全ては紅蓮の言葉に同意する

ただ……二人だけが

「……我が臣下。皆……馬鹿者よ……！」

「そなた達……！」

辛酸と言う言葉を表情にすればこうなるだろうという面持ちで……

唇を真横に引き締め、前歯で？み……血を流すその姿。苦渋の選択を

二人は見渡す。データ・リンク越しに、網膜投影に映るこの場に居る者達全てを焼き付けると

冥夜と悠陽は眼を開いて刮目する。その顔を、表情を――――
決意に満ちた眼差しを

胸に刻まんとする二人。その胸中にて混ぜかえる感情を

フラート。網膜投影、戦域マップ。増え続ける赤に対して――凱
旋門方向より

武御雷の群れが舞い降りてくる。識別信号――斯衛第16大隊

そして――赤狼の部隊

「参戦遅くなりました…誠に申し訳ありません。殿下」

かつて、欧州はドーバー基地。斯衛軍衛士養成学校2回生という身分で持つて

“ツエルベス”大隊へと派遣された青年。戦術機に乗ることも、まして任官する事も無く

初の実戦を迎え、見事に戦いきり――“ツエルベス”大隊。その末席へと加えられた衛士

真壁清十郎。ブレイズウルブズ……赤狼隊。紅の“武御雷”を駆る部隊隊長

その部隊と斑鳩栄司が率いていた第16大隊の援軍により

冥夜と悠陽が覚悟せんとした感情を霧散させる

「ブレイズ1。真壁清十郎。馳せ参じました。この場は私共と――」

清十郎が率いる白と黒の武御雷の群れと

「第16大隊の者達とで時を稼ぎます。殿下、このような場となりましたが……御拝見できましたことを嬉しく思います」

今も……斑鳩栄司を慕う者達が構成する第16大隊の白と黒、そして微かな紅の“武御雷”

総勢、100機に届きそうな程の“武御雷”の機影。日本帝国全ての“武御雷”を集めたと言っても過言ではない

その圧倒的な数が冥夜と悠陽たちの後方よりNOEで駆け去っていく中

清十郎は慇懃にコクピット内にて深く頭を下げつつ、言葉を紡ぐ

「なおも、嬉しいという言葉が……この場にて不謹慎な事は重々承知しております。が……紅蓮大將がお告げになりました……殿下の明日を」

「護れる栄誉を受けられと為りましたは……我が隊。全ての者が誉思っております故、どうか寛大な御心を……」

「……真壁。と申しましたね?……そなたの兄弟の幾人かには会った

事を憶えております」

「おお……！御心の隅にて名を刻めたと為れば、我が兄達も喜んでお
りましょう」

「……場が場です。コレにて切り上げまし、二つ問いたい」

清十郎の言葉に悠陽は心の片隅にあった名を思い出して紡ぎ……逸
る気持ちのままに問う

「第16大隊の者達は——」

「……責は私が取ります。されど、彼らも閣下が認めし、殿下の窮
地。見過ごす事は……閣下への忠誠を侮辱することとなれば——」

「……私には過ぎた言葉ですが……その想い確かに受け止めました。
真壁、斑鳩殿は城内にて——」

清十郎へと問いかけた言葉は……正しく、斯衛の在り方。己が主君
と認めた者への真っ直ぐな忠誠

ソレを掛けられる悠陽自身は———そのような気持ちを受け取れ
るような立場ではないと、逃げ出すしかないと感じ取ってしまった
いたが故に

紡ごうとするも——

「みなまで……告げられるは斑鳩閣下への侮辱と……小官は愚考いた
します」

「「「?!?!?!」」」

悠陽の言葉を遮って告げた清十郎の言葉に…緊張と唾然とした空気が蔓延しだす。無理も無い……国のトップ相手に意見するのであるのだから

まして、強い非難を込めた声音で紡げば

しかし――

「小官には…殿下と閣下の間で何があったかなど……分かり申しません。ですが」

当たり前だ…五摂家の一員たる斑鳩が叛乱を起こした等、公表できる訳が無い

幸い。幸いと言う言葉が正しいとは思わないが……表立って行動を起こしたのは

超党派勉強会である”戦略研究会”。狭霧直哉。ただこの男一人に泥を被せることによって水際で事の真相を隠せれても

「十六大隊の者達を見ていれば……臃げですが、見えてくるモノはあります」

コレが……冥夜や、紅蓮。真耶や真那など……近しい者が紡いでいると為れば、頑んなに拒んでいるであろうが

真壁清十郎は外様。確かに、斯衛軍の一員であるも――

「ですが、それでも——誓いを立てた者が認めた者。殿下の為に馳せ参じているのです」

淡々と告げる。ただ、ありのままに…

その言葉に何も言えなくなる。誰もが、沈黙を落としてしまうも

「…不躰な物言い。誠に申し訳ございません！此度の非礼は我が首
——」

「よいのです。真壁清十郎」

今度は悠陽が清十郎の言葉を遮る。紡がれた言葉を一句一句噛み締めるように飲み込みながら

「——後の事を願えますか？」

「はっ！！身命に変えましても！」

反射のように悠陽の言葉に応えた清十郎であるが

悠陽がゆっくりと首を振るのを訝しげに思うも

「帰って来るのです。必ず。最早、一人たりとて容易に死ねはしません」

突っかえていたモノが消えたような表情を浮かべて

「取り返す為にも……必ず、帰ってきなさい」

「……………はっ!!」

そうして…赤狼の頭も飛び込んでいく。紅に燃える帝都へと

「行きましょう。冥夜———多くの者達の想いと共に」

「はっ。姉上———我等が愛した人の」

「^{ギアス}願いを果す為に」

燃ゆる帝都を背に、歩き出す

呪いとも呼べる……“愚者”が残した思いと己が抱える想いを胸に

“この世界”。幾億、幾万、幾千の世界———白銀武へと恋慕を抱く筈の姉妹

だが、それでも……“この世界”だけは、何億兆の確率でしかなく在りえてはいけない“世界”であろうが

“この世界”の御剣冥夜と煌武院悠陽にとっては――

兵共が――

―ユーチャリス 艦橋

陶器が澄んだ音を立てる

氷が溶け……形を崩して音を立てる。カランという渴いた音を立て

「…ま、す…たー……」

ユーチャリスのオペレーターシート

かつて、共に過した桃色の髪の少女。自身の友と言っている存在

ラピス・ラズリが座っていた場所に身体全てを預ける

背凭れに全体重が掛かり、弛緩した肉体はその場所に転がっているだけの姿

手にしたカップを揺らめかせながらに中空へと視線を投げ出し

「…ます、たー……！！」

口元が歪む。悲しみと寂寥によって……噛み締め、涙堪えんとする形へと

瞳は半透明の宙へと浮かぶウィンドウへと投げやりに向けられる

「……ごめんなさい…！わ、わたし…じ、ぶん…ばっ、かり…で…」

声が聞こえてきた。サラと同じように涙する乙女の涙声が…

自身が告げた真実に——向かい合う戦乙女達

凭れかかっているシート。手すりに設置された艦内操作を行えるディスプレイに配置された一つの機能

ON／OFFを司るソレのシステムをONにして、ウィンドウを閉じる。そうして自身の視界を遮るように

右手の掌で目元を覆う。左手に持ったカップを手すりより滑り落ちた左手で淵を指先だけ持ちながらに

「ごめ…ん、な…さい…！！」

誰に…謝っているのだろうか？…記す事などしなくても分かるだろう

「喋っちゃったあ…！！」

口元が引くつく。罰の悪い笑みを浮かべようとして——失敗した……惨めな笑顔

怒られた幼子が…誤魔化すような笑み。浮かべようとして、失敗した……悲しい笑顔

「謝るからあ……!!」

覆い隠した目元から流れる液体。熱く、想いが込められたソレが頬を伝い落ちながらも

「怒っていいからあ……!!」

ありったけの声量で叫ぶように劈くひざし

「自分勝手に……!ぶちまけちゃった……ばくお……!!」

「しかりにきてよおおお!!」

もう、置いて逝かれるのは——嫌だ

何もかも諦めた“黒の王子”

朽ち果てた後を追った桃色の髪の“妖精”

置いていかれた自分オモイカネ

想いかえし……慟哭を上げる

—2001年 11月11日 明朝 帝国軍技術廠

活字の羅列。所々に単位と数字

真っ白い紙に専門用語であろうか？

NOE。アビオニクス総合電子制御。ALM

様々な用語と数字がその紙の内容を構成し形作る

彼女の通常業務。技術試験小隊——“ホワイトフアングス白い牙”元隊長

篁唯依の現在は——

「篁中尉。そんなに根を詰められなくても…」

自身の執務室。アラスカへの出向が解除となり…“愚者”の指揮下から外れた彼女は

元居た場所。巖谷大佐が率いる技術工廠へと

「済まない。伊隅中尉……ありがとう」

共に出向していた伊隅まりかと共に戻ってきており、彼女が入れてきた合成緑茶が入った湯飲みを受け取りながらに答える

「……また、少佐のデータと比較検証していたんですか？」

まりかが唯依の手元にある資料群と報告書へと視線を落としていつ問いかけ

「ああ」

淡々として、抑揚の無い声音で答えると

「前にも言いましたが……私の事はまりかで……って?!」

呆れた顔でまりかが書類へと注いでいた視線の中で見つけた物によって、言葉を中断する

素っ頓狂な声音が上がり……唯依の手元にあった一枚の書類を引っ手繰るように取り上げて

「唯依さん?!こ、コレって……!!」

「軍務中だぞ……。ソレと正式書類を勝手に引っ手繰らないことだ。まったく……」

呆れた面持ちでワナつきながらに書類を食い入るように見つめるまりかへと嘆息をもらしつつも

言葉ほどに強い態度を取らない唯依は、まりかが持つ書類を取り上げる

其処に書かれている事は――巖谷大佐からの“黒の騎士団への出向要請受理”に於ける命令書

「だが、まあ……その、ありがとう。伊隅中尉」

前半は軍人として……後半は戦友であり、共に焦がれる者を持つ同士として

「貴女が居てくれてよかった」

「そりゃ、どうも……ですけど。私、恋敵ライバルに塩だけじゃなくて武器も贈っちゃったかな？」

微妙な表情を持って返すまりか。唯依のスッキリとした表情は……ユーチャリス乗る前と降りてきた後の雲泥の差でもって

薄々と分かっていたものの――

「かもしれないな」

「あんまし身に覚えがない……。ああ……あの時、一緒に居なければ良かったかも……」

「一緒に居なければ、伊隅中尉はアラスカにお供できなかったと思うが？」

「なにその意地悪い笑顔？唯依さんって、結構……強か？」

「いや、問われても私には答えられないモノじゃないか…」

少し、余裕の笑みを浮かべて頷いた唯依に対して、まりかはアラスカで唯依が吐いた弱音を聞いていた時かと

見当をつけつつ愚痴ると、唯依がまりかの言葉通りの表情を微かに浮かべて答える。続く投げ掛けに苦笑するしかないが

「自分では、そういうモノとは感じないんだが…」

「ふうん…。けど、少佐の船に乗って帰ってきたら。な〜んか、一人でスツキリした顔付きになってるし……」

ジットリとした眼つきで唯依の懐へと顔を押しやり、そのまま下から覗き込むまりかに

「きゃっ?! ちょっ、ちょっと伊隅中尉?!」

「抜け駆けしましたね…?」

幽鬼のような表情を浮かべて、凝視するまりかに抗うことができず……ブリキのような軋んだ音を響かせそうなほどに

ゆっくりと首を背ける唯依。態度からして――

「したんだああ?!?! ひどおい!!」

「いや、その、あれ、で……だな」

「言い訳ですか?! そうなんですね?! 一人だけ…おいしい思いつておきながら…!」

今にもハンカチを噛み締めて唸りを上げそうな———実際、上げている。まりかの陰相に

「……もう、戸惑わないって、決めたの」

一度伏き、前髪が表情を一瞬だけ隠す。その下に浮かぶ狂おしいまでの想いが詰め込まれた覚悟の表情

ソレを顔を上げると共に変えていく。覚悟を決意へと———

「誰になんと言われても———私は、私のこの想いを否定しない」

左胸に手を置く。心の臓器が埋め込まれている胸。

だが、其処に魂や心が格納されているなどは現代医学では解明できないというのに…

想いを吐露する時———

「諦めない。必ず、必ず……あの人の傍らに寄る辺を作る。私の居場所は———」

人の多くは胸に手を当てる。本当に其処に確固たるモノがあると本能が悟っているかのように

「其処だけでいい」

言い切る。あまりにも……あまりにも“愚者”の傍に居たが為に

——照射警報。一瞬で真っ白になった思考。浮かび上がったのは“愚者”の姿。呆然と映像としてしか認識できていない視界の中に高速で迫る“真改”

スノードロップ
待雪草作戦

——新緑の禍々しい肢。要撃級の前腕部が迫り来る中、中空より放たれた一撃。天空より舞い降りてくる“R-1”

新潟絶対防衛戦

——プロミネンス計画。極寒の大地、アラスカにて見てしまった……想い人と別の女との逢引。愕然となる自身

Black Evaluation

——幼き孤児達に語る姿。老婆の問いかけに答える……後姿

黒の騎士団。帝都支部

——渴いた破碎音。手に持っていたマグカップをかなぐり捨てて、“愚者”を押し倒す。クシャクシャに歪んだ面のままで叫ぶ。叫びきる。想いを

ユーチャリス。“愚者”の胸の中

本当に様々な時を共に過ごしたが故に、焼きついてしまっていた。

呪いのような想いが…

「其処だけで……いいんだ」

憂いの表情。宿る想いを抱きしめんとする姿に

——敵わないかな……

思うはその一言。瞳を伏せて、願いを届けようとするかのような、育て上げた想いを、真心を

心地よい沈黙が浸る。互いの間に

唯依は自己へと埋没しまりかはそんな唯依の姿を眩しげに見やる。寂しげな眼差しを持ちながら

そんな二人の時間を……劈くように切り裂く音が鳴る

「なっ?! 非常警報?!」

「……即応体勢と防衛基準態勢5だと…!」
レッドコンディション デフコン

部屋を満たす赤い点灯。金切り声を上げたかのようなけたたましい
警報

そうして、二人が居る部屋。その窓辺から見えた

「ほ、ほね…?!」

まりかの眩きは正しくそうとれる

骨に骨を継ぎ足し、骨が皮のように張り付くいたような姿

今はまだ彼女達に知る術はないが…：目にしている者の名は――
アインスト・クノッヘン

Knochen Ⅱ 骨。名が体を現すように全身が骨によって構成された

大型のアインストの中では最下級に位置する化け物の姿が二人の目に飛び込んでおり

「観測手^{リーダー}は何をやっていたんだ?! こんな、目と鼻の先にまで侵入されるなぞ…!」

口を一文字に引き締めて呻くように言葉を吐き出しながらも唯依は眼前で起こる事象。クノッヘン数体が基地へと侵入しつつ建物を叩き壊していくのに対して反射的に身体は駆け出す

自身の山吹の“武御雷”が座す。格納庫へとそれにまりかも続き廊下へと一歩飛び出せば

「早く! 回せえっえ!」

「BETAなのかよ?! ありゃあ?!」

「知るかあっあ！！とにかく、戦術機だ！戦術機！！」

「衛生兵！衛生兵は居ないのかあ？！」

阿鼻叫喚。誰もが怒声を上げつつも各々が出来る事を成す為に駆けずり回る光景

それを尻目に二人は駆け続ける

「唯依さん！！格納庫までの合間の渡り廊下で！」

「分かってる……！最悪、鉢合わせするぐらいは……！」

彼女達が目指す格納庫。唯依の“武御雷”にしろまりかの“真改”にしろ

一般の機体とは一線をかく機体

なまじ、機密性の保持ゆえに別区画。隔離された場所へと格納されているが為に

背に嫌な感覚が忍び寄ってくるのをヒシヒシと感じながらも駆ける。全力で

一分、一秒が生死を分ける狭間というのを理解しているからこそ

前方の扉を蹴飛ばすかのように押し開ける。広がる視界

まだ、夜闇が完全に払われていない時間帯。雨雲に覆われたような

空が示すかのように

「くっ……!!」

二人の眼前に聳え立つ化け物。完全な二足歩行にて闊歩するクノッヘン

その一体が……まるで唯依達を待っていたかのように

腰を押し曲げ、手に相当する鉤爪を此方へと向ける姿

息を呑む二人。赤いツインアイが怪しく光り、二人へと真っ直ぐに突き立てるように刺突を

放とうとするも――

盛大な爆音が響く。爆音。36mmを連続に吐き出す突撃砲が奏でる音

遠くから聞こえる。といっても唯依達は防音装備などしていない。もしも、コレが間近であれば難聴に掛かるは容易いことは置いておいて……

脳を揺さぶるような轟音。耳元を反射的に押さえながら眼前にてチエックメイトを掛けてきたクノッヘンが

崩れ落ちる姿を見上げながらに飛来してきた36mmの発射元へと視線をやれば

「篁中尉！伊隅中尉！早く、格納庫へと行きなさい！！」

Type-82C

1982年に配備が開始された77式戦術歩行戦闘機“撃震”の改造機

将軍家の守護を主任務とする斯衛軍専用の機体として運動性の強化と軽量化を主眼に開発

機体色は武御雷と同様6種存在しF-4の改造型としては、最も後期に開発された機体

武御雷と同様、整備性や生産性を犠牲にした性能の向上が図られた戦術機

「お、おじ様?!」「巖谷大佐?!」

“瑞鶴”。2001年、現在も“武御雷”の斯衛軍全体への配備が完了していないが為に

二十年余りの時が過ぎて尚も……人類の剣であり、五摂家の守護者を担う人型機動兵器

「グズグズしている暇はないぞ!」

唯依達に襲い掛かっていたクノツヘンへと止めを刺すために

地上で生身の二人を巻き込まないほどに卓越した操作

“撃震”同様、腰に装備されたスラストノズルを一吹きのみ行う

スラスター弁が噴出す焰は並みの衛士ならば必ずと言っていいほどに、助走たる盛大な火を吹き上げなければ行えない一足飛び

それでも、尚…その芸当が出来るのとしてベテランの域に懸かりだした中堅からの芸当

ソレを行い…機体を一足飛びにクノツヘンへと差し迫らせる

旧OS。“XMO”が搭載されていない戦術機でそのような芸当が出来るからこそ――

「戦いの呼吸というモノを…!!」

伝説の衛士。かつて、模擬戦闘において当時最新鋭のF-15C“イーグル”を

“瑞鶴”で持って撃破した兵は一飛びで詰めた間合い

突撃砲を持つ左のマニピレーターとは別に右に持たせていた74式近接戦闘長刀が、さざめく

正眼の構えを片手で起こし持って突撃。刃を押し込む力を兼ねた飛びは寸分違わずに

横合いからの36mmの奇襲によって、腰砕けのようによろめくクノツヘンの片腕へと斬り潜る

確かな肉厚を“瑞鶴”のコクピット内のスティック越しに感じ取り、押し込みつつ下げる。上段よりの押し斬りで以って

本体と腕を呆気なく切断する。中空にて忘れられたように置いていかれるクノツヘンの腕は重力に牽かれゴトリと墜ちる

しかし……働き蟻のような存在たるクノツヘンに脅えや、弱腰などになる感情は持ち合わせておらず

間髪居れずに迫ってきた“瑞鶴”へと残った腕の鉤爪にて応戦する。よろけて体が崩れ落ちながらも

頭部モジュール付近へと叩きつけるように腕を薙ぐも――

「貴様ら、化け物共は理解できまいて……」

薙ぐモーションを取り出しているクノツヘンの腕など……閃光の彼方に置き去りにしているように

長刀がクノツヘンの片腕へと潜っていた現状は、“瑞鶴”の上半身は深く下げられている。上段紛いからの切り下ろし

必然的にクノツヘンが目標としていた頭部モジュール付近。崩れながらも反抗できる部位は其処にしか残っていないが為に

釣られてしまう。戦いの呼吸を、作法を知らぬ化け物共は……作られた“好機”を本当の好機と勘違いしたままに

繰り出した瞬間には……ゆっくりと潜っていこうとする光景を

ブチ当たる瞬間には……完全に目標は？き消えている光景となる

滑稽なほどに、反抗した残った腕ごと“瑞鶴”を駆る巖谷は振り斬る
沈めた上半身。機体の素体に位置するインナーフレームの腰バネを
利用して、袈裟上げに斬り飛ばす

振るわれた腕ごと薙ぎ払われ：上半身が下半身が無くなる。吹き飛
ばされる醜惡な身体は宙を軽く舞って無様に地に落ちる

そのような光景を背に二人は駆け去る。互いの愛機へと辿り着く為

「行かせはせんぞ」

二人の乙女へと追い縋ろうとするクノツヘン達へと長刀を構える

——夢の跡

—2001年 11月11日 帝国軍技術廠

能というモノを知っているか？

鎌倉時代後期から室町時代初期に完成を見た、日本の舞台芸術の一種

日本舞踊の代表的に取り上げられる芸

もしも……“この世界”にユネスコという組織があったならば、無
形文化遺産として指定を受けるであろう程に

洗練され、濃密されてきた……血脈と魂を色濃く受け継いでいくモ
ノ。日本人の心意気を表す一種としても通用する

“能”

正しく、今、この場にて——

繰り広げられるモノは

「骨BETA!! なおも増大！」

データ・リンク越しに聞こえてくるCPの切羽詰った声音をしかと鼓膜に捕らえながらも

彼の身体は微塵の焦りを生じさせない。否、生じさせるわけにはいかない

網膜投影に映るは、男が乗り込む人型機動兵器。斯衛軍初の戦術機。Type-82C“瑞鶴”

そのマッドブラックを纏う戦術機を駆る、巖谷の視界に映る——アインスト・クノッヘン

現状、CP達による呼称は骨BETAもしくは骨と呼ばれる化け物を収まる範囲内にて四つの姿を確認し

そして——舞う

一つ一つの動作が重みを持ち、気品を持ち、優雅さを

されど、俊敏に。動くべき時には尊ぶように、正しく“兵は拙速^{へい せつそく}を尊ぶ”如くに

濃密な仕草。血脈が織り成してきた術^{すべ}。脈々と受け継がれてきた剣術

まさしく“能”。見る者を惹きつける。魅了する。“伝説の衛士”たる

「CP。伊隅やよい中尉、残敵は？」

巖谷榮二は堂々たる死の舞を踊りきる

相対する四体の化け物達から掠り傷受ける事無く、無造作に殲滅した

「：震源センサーなどに感がなく、従来の索敵機能では捉えられませんでした」

沈痛な面持ちで持って答えだす

「唯一、光源センサー類によって：“骨”共が現れる際に著しく発光を伴う事によって大よそを割り出しております」

「なお、近隣基地へと増援を願っておりますが――」

歯切れの悪い言葉を巖谷は軽く引き継ぐ

「此処と同じか」

「はい、大佐。近隣も我々同様に……未確認のBETAと思しき化け物共に強襲されている模様で」

「奇襲にして、強襲だな。我々が持つ警戒網がまったく役に立たないとは……ゼロ少佐ならば、何か知っているかも知れんが……」

遠くに燐光が舞うを認識しつつ、基地へと次々と乗り込んでくる二桁はいくであらうクノッヘン達へと

87式突撃砲の36mmチェーガンによって出迎える。強化装備によって顎に装着した多目的デバイス越しに無精ヒゲを撫で付けるよ

うにしつつ

出撃前は出勤前の身嗜みの最中。髭剃りの途中であった故に、少し違和感でもあるのであろう……其の仕草が様になる

このような前代未聞の出来事に対して、どっしりと構える巖谷の相貌はデータ・リンク越しに兵達に一種の安寧を感じさせ

「数の程は……現在、分かる範囲内においては百は下らないかと」

「……………BETA共も“学習”してきているという事なのか？それとも、実験的なのであろうか？」

呟くように告げた言葉の先にて……………クノッヘンの一体が自身を構成する骨と見れる部位を切り離して

中空にて高速回転させ始める。一人でに、見えない力が作用して——シック・ナーゲルとして撃ち放つ

「なんにせよ……！苦しくなるな、“人型”が現れたという事は」

高速で飛来してくる物体。されど、光線級のレーザーとは段違いの速度

たとえば、旧式のOSであろうとも……………巖谷並の腕を持ってすれば、意図も容易く回避できる。発射を意図した時には着弾している熱線とは違うのだから

「CP。奴らの中に光線級は居るか？」

「いえ、現状：既存確認種は一体も確認されておりません」

「そうか。上げられる戦術機は？」

「全て、上げております……」

「全機。といっても、十二機。一個中隊程度、か！」

シック・ナーゲルを放ってきたクノツヘンへと36mmをプレゼン
トしつちに紡ぐ

此処が……技術廠ゆえに、並の基地程度の戦術機は配備されてい
ないのを少し嘆きながらに

それでも、並の技術廠以上に配備されているのだから

「まあ、家の部署的おうちもつけんには破格の配備数なのだから……贅沢は言えんが」

「CP。篁中尉と伊隅中尉が駆る戦術機も含まれているのか？」

「いえ、あの二機は管轄から離れていますので」

「……それでも、俺を含めて十五機か」

そう呟きつつ、データ・リンクに映る敵機の機影数を見やる

前方及び横合いも夥しい程のスピードで赤く染まっていく戦域を見
つつ、決断する

「伊隅やよい中尉。基地内の試作兵器群のデータを至急を取り纏め

よ」

「?!?! ほ、放棄されると?!」

「足掻きたいのは俺もなのだがな……秒加速的に増殖してくる化け物相手では」

会話を交わしている間にも次々とシック・ナーゲル放ってくるクノッヘンの群

「もたんだろう。それに……何時、光線級が湧いてくるか分からん。迅速に行動を開始せよ」

上がっている戦術機が巖谷の“瑞鶴”ただ一機のみ故に……集中的に襲い掛かってくる

波の様に、骨が飛び交ってき……致命傷には程遠いも、微かずつに“瑞鶴”の装甲が削られ

「緊急展開だ。持っていけそうなモノだけ詰め込め。ムリーヤも一機。最低限でいい……飛べればな」

巖谷の表情が強張っていく

「進路は、佐渡ヶ島だ。……今後を考えれば。基地所属の戦術機は全機、私と共に防衛」

「篁中尉。伊隅まりか中尉の二機はムリーヤの護衛だ。……済まん、皆、私の我俣だ」

「いえ、誰も大佐の判断は間違っているとは思いませんよ。あの二人は直接、ゼロ少佐と面識がありますし……よく、目に掛けてもらっておりますから」

下した判断に間違いはないと——技術廠の兵全ての心境を代表してやよいは告げる。彼女と同じく指揮所に詰める者達の誰もが頷きながらに

「……………我々の努力の結晶を化け物共にくれてやる訳にはいかん。皆、済まんが私に命をくれ」

痛切な思いを込めて告げる

「「「「了解!!」」」」」

データ・リンクで繋がる。全ての兵士が意気揚々と答えた……誰も悲愴な面持ちの者は居らず

ホワイト・フアングス
「白い牙“不知火”及び“不知火・壺型丙”十二機。ハンガーエレベーター内から出ます!!」

やよいとは別のCPが叫ぶように告げた時——巖谷の駆る“瑞鶴”の後方より

日本帝国軍カラーの“不知火”十二機が飛び出してくる

「我々の希望——やらせはせんぞ!!!!」

―指揮所内

「北部よりなおも、光源の感あり!!」

「西部よりも同じく……推定規模は30程!!」

普段ならば――この技術廠の中枢たる情報端末メインルームは多くのモニターに新型兵装ならびに戦術機の各改良、新規製作の為に日夜多くの機械を映しているはずであるが

現状、化け物達への対応がもつともスムーズに進める場所として活用されている中

元々その為の施設設備ゆえに受けた任を最速で処理していけるのを御の字と思いつつ

――19から37は完全破棄。完成間近のと……アレのデータだけは必ず……!

必死の形相で計器類に手元のキーボードを叩き続けるやよい

彼女と同じように誰もが懸命の表情で己が出来る事に全力を持ってあたるも

「フアング11!胸部ユニット:コクピット直撃!!
生体反応^{バイタルシグナル}信号
途絶!!」

「フアング4、右脚部損失！自立歩行不能！！ベイルアウト脱出してください！少尉！」

「小型種で埋め尽くされてらあ！！！！どうにもならねえよ！！スーサ主機暴走イドやれねえしよ……！！」

「フアング6！骨1撃破！」

「坂本！！36mmと120mm！粉微塵にされるのと吹っ飛ばされるのどっちがいい？！」

「ありがてえ！！弾倉撃ち尽くすまでは待ってくれよ！！」

「光源反応確認？！？！敵増援の感あり！！推定……なによこれえ？！70！」

「くそがああああああ！！！」

「現存敵生体、およそ小型400骨120！」

悲鳴と怒号。マズルフラッシュと銃声。そんなモノをBGMに只管にやよい達は指示されたデータを纏め続ける

皆が皆が……唇を噛み締め、悲愴の面を食い縛ってコンソールに齧りつく中

シック・ナーゲルの一つが——やよい達が座すこの場所へと掠めていく

轟音が響いたと同時に盛大な振動と機材が倒れ

「きやあやあああ！」

「げぺ?!?!」

「か、壁が、かべがあああ!あああ!」

外壁が割れて中に居る者達へと襲い掛かる

ある者は衝撃によってコンソールがショートしモロに感電死

ある者はシック・ナーゲルによって挟まれ飛び散らされた外壁の破片が頭部を直撃し…トマトのようにあっさりと破裂

ある者は同じように跳んできた外壁。瓦礫と言ってもさしさえのない大きさの破片が身を覆い潰す

様々な結果を辿るも、此処につめていた者の六割方の命を奪っていく結果に

そうして――

「うつ…うつうつ…」

奇跡的にか、それとも…まだ彼女には果すべき義務があるというのか?

額に浅い裂傷を負い衝撃によって倒れた際に細かな傷が出来るも

「で、データ…纏め、なきや…」

意識が朦朧としそうになりながらも伊隅やよいは自力で立ち上がる
自身が張り付いてコンソールは微かに生きており

「…………不幸中の幸いとも言えるの…?」

新型兵装類のデータの殆どが吹っ飛んでいるも…………最重要故に強固
なプロテクト等を掛けられていた

“アレ”のみは欠損する事無く生きており、未だ情報記憶ディスク
へと書き込みが為されている

「CP?! 応答せよ! CP!!」

「こ、こちらCP。伊隅やよいです!」

巖谷の怒声の叫び声に身体を一瞬、硬直するも頭を振って霞が懸か
った思考を戻しつつに応答

「無事か?! 他の者は?!」

巖谷の問いかけに、恐る恐る他の者達が居る方向へと視線を向けると

「うっ?!」

「…………君だけか。済まんが中尉、感傷に触れている場合ではない

のでな。データの方は」

込み上げる嘔吐感を堪え、仲間達の無残な姿に視線を逸らして氣力を振り縛りつつ

「……“強化ユニット”に“素体”のみですが」

「ふっ…！地獄に仏が居るとはな…！いや、この場合は閻魔か」

擦れつつあるデータ・リンク越しに自嘲の色合い濃くも巖谷は大きく頷き

「伊隅中尉。データを必ず、殿下と騎士団へと届けよ」

「…はっ！」

「ソレは必ず、この国の剣となる力だ。頼んだぞ中尉」

「大佐も御武運を」

「ああ。さあ、行け！余り時間はない…！」

巖谷の発破に押され、仲間達の亡骸に走り出しながらに敬礼を置いて

彼女は走り出す。書き込みが完了したディスクを持って——新型戦術機の設計図を持って彼女は走る

設計図上に記されていたのは……黒の騎士団が開発した“プリトウエン”に似た強化外骨格

更に突き詰めれば——似ている。ヒュッケバインMK—?が運用するシステム

強化外骨格換装パーツ…AM。かのSRX、それを“小型、高性能”を目指して開発されたアーマード・モジュール

AMボクサー。似て非なるパーツ群

その中央に位置するべき機体はシルエット上に表示されており

シルエット上部に書き記された文字と絵は

Type-00X

試作ナンバーが振られた“武御雷”と酷似した姿であった

明日へ――

―帝国軍技術廠 格納庫

怒声、罵声。甲高く鉄がぶつかる音

軍靴が踏み鳴らすタラップの音。一段一段踏みあがるのもモドカシク
段飛ばしに駆け上がる二人

「“武御雷”の用意は?!」「真改行けますか?!」

唯依とまりかは揃って周りの音に負けないぐらいの声音を張り上げ
ながらに走る

目的地へと――戦術機のコクピット。管制ユニットを繋ぐハンガ
ーへと

「篁中尉! 伊隅まりか中尉!」

そんな二人に声を掛けるは迷彩色のツナギを着る女性。と言っても…

齢は二十歳は愚か十八ギリギリぐらいにしか見えない少女

「軍曹。状況は?!」

楠本さやか軍曹はモバイルユニットを膝に置き

コクピット内のコンソールに繋がったソレを懸命に叩きながらに

「あと15秒程で行けます！装備は過重量デッドウェイトギリギリまで積載してます！」

言葉だけを唯依へと返ししながらに手元を叩き続けて最後のエンターキーを押し

「CPから何か入ってない？！」

「………残念ながら、伊隅やよい中尉以外はCPの方達は全滅した模様でっ…」

次いで問いかけたまりかを見やり、唇を噛み締め沈痛な面持ちで返す。視線を微かに避けながらに

「?!」「お、お姉ちゃんだけ…！」

「とにかく、戦況は不利となっていく一方であり敵は未確認種であり光線以外の飛び道具を使用すること以外は然したる情報は…」

「…そうか。分かった気をつけよう。確認された情報については反映されているのか？」

ホワイト・ファンクス

「“白い牙”の“不知火”の方でデータを保持していますのでデータ・リンクにて」

「武装の方はまりか中尉は強襲掃討。ガン・スライパー“真改”なので長刀もありま

す。特に：聞いた話だと人型は割と俊敏らしいので近接はお気を付けて」

「ありがとう。楠木軍曹」

本命が待ち状態故に別のプログラムを立ち上げて、まりかの強化装備の網膜投影へと装備群流す

CIWS《近接防御砲塔》×2

零零式突撃砲×4

74式近接戦闘長刀×1

36mm砲弾倉×12

120mm砲弾倉×5

「……本当に詰め込めるだけ詰め込むって事は…」

さやかが流してくれるデータ。積載量ギリギリというより少しはみ出る位

ソレも砲弾倉による過剰となれば――

「巖谷大佐は、放棄を指示されたのか?!この技術廠を?!」

「………はい。中尉」

次いで唯依にも流しつつ、標準の突撃前衛装備に本来の多目的装甲ではなく

両のマニピレーターに突撃砲を載せる形での装備群

まりかと同じく砲弾倉を詰め込めるだけ積み込む——隠し爪的存
在の固定兵装たる00式近接戦闘用短刀を改造して投擲兵装を兼用
していた所まで

00式近接戦闘用短刀を外して、弾薬を詰め込む徹底振り

「……………分かった…」

万感の思い。己の原点であり、この場所は初めて——

——少佐……

焦がれる想いを向ける者と出会った場所。言うなれば、此処は篁唯
依にとって

“故郷”の一つである場所だからこそ

暗い表情になる。だが、気持ちを強く持って前へと向く唯依

吐息を吐く。まるで……此処にある想いを吐息で包み込み。連れて
行くような

ある種、神聖にして厳かな姿。先と同じように胸元に拳をやりソコ
にあるであろう想いの形を

唯依だけが手に取るように分かるモノを確かめながらに

「という事は、騎士団の方へと身を寄せるとのことだな？」

「はい。準備完了しました」

「了解した。我々も直ぐ出る」

唯依の問いかけに肯定し、手元のモバイルが“プログラム”のイン
ストールを終了したと表示し

さらに言葉を付け足す。唯依はそれに対して微かに首を立てに振っ
て応答し

「お二人とも！御武運を」

「ああ」「軍曹は早くムリーヤに」

コクピットから飛び出し、代わって本来の居るべき者。唯依が山吹
の“武御雷”へと着座した時

さやかは最敬礼と強い眼差しを持って二人へと敬礼を送る

それに答礼する唯依とまりかはそれぞれに言葉を残し

“武御雷”出るぞ！周囲の者は下がれ」

「伊隅まりか。“真改”。出ます！」

互いの戦術機が動き出す

87式輸送車両。本来ならば……この輸送車が詰め込むは戦術機

厳密に言えば、運んでいる“物”は戦術機ではないが

それでも並みの戦術機よりも遙かに重要性が高いパーツを

新型特有たる真っ白いビニールシートに包まれただけであるソレら
コンテナに詰め込むのもどかしいという勢いで四苦八苦しながら

「腕部パーツの詰め込みは完了!!」

「上半身構成群は詰め込めたな?!」

「はい。班長! 頭部ユニットも肩部ユニットも!」

「脚部はなにやってんの?! さっさとしやがれ!! 化け物共は待つ
ちゃくれんぞ!!」

「あと二機車両! 左右の脚部パーツで完了です!」

整備員ならびに開発陣が声高に叫び、各々が出来る精一杯で詰め込む
たった一機のムリーヤの中に――

「伊隅中尉。本当に良いんですか? タイプXは管制ユニットと頭部
モジュールだけで…」

そんな喧騒の中、手にしたディスク片手に詰め所に在った救急セツトを使って

おざなりに頭部へと包帯を自身で巻き続けるやよいは

「ええ。どう頑張っても、分解状態の戦術機一機分しか乗せられないのですよね？」

「まあ…そうですが」

「なら、一番重要なパーツを詰め込むしかないかと。幸いにもタイプXは殆ど、“武御雷”そのものですもの…」

本当に止血程度しか施していない傷に当てる包帯を巻き終わり

毅然とした眼差しでメカニックチーフの男へと言い切り

「アーマード・モジュール外骨格装備……ホント、此処に斯衛軍の方が篁中尉だけで良かったですよ…」

溜息を吐き出しつつに肩をすくめる男に対して

「そう……ですね。心中、複雑でしょう…佐渡ヶ島の一件以来」

「面白くないのは分かりますよ。一介の整備士がとやかく言えるわけが無いですし、実際…騎士団のおかげで佐渡ヶ島を取り返せたのは事実でしょうが…」

深く被る。顴ありの迷彩柄のキャップへと手をやり

「こうも、技術差が顕著だと技術屋にしろパイロットにしろ…誰だって面白くは無いでしょう。今までの努力はなんだったのだと…我々の血はなんだったのか」

「…班長が思う事も一理あるでしょうけど、今は――」

「ええ。分かってますよ、コイツを此処以外で形にしようと思うなら騎士団しか後はないんですから」

そう言って男は後ろで運び込まれる最後のパーツを見やりながらに

「それと、篁中尉と伊隅まりか中尉の機体はご指示通りに」

「…ありがとう」

男の言葉に対して脳裏に浮かぶは三女の妹と唯依の姿

巖谷が下した命。ソレを必ず遂行する為には――

「さあ、伊隅中尉も早くムリーヤへ」

「……」

掛け声に対して、なんと答えればいいのか……

遣る瀬無い面になるやよいに男は苦笑いを浮かべ

「俺には責任があります。この現場の長たる責務が」

言葉を紡ぎ出す。なるべく――

「大佐も同じ事を考えてるでしょう。だからこそ、此処の“放棄”を決断された」

「たとえば、知性が無い化け物達であっても……此処を汚されるのは堪ったものじゃない」

やよいの負担にならないように、自分達自身が選択したんだと強く思わせるために

「どう頑張ってもコレだけの時間では、ムリーヤ一機用意するのに精一杯。それも戦術機が、衛士達が身体を張って、文字通り身を削りながらに…」

視線を格納庫の出入り口へと向ける。今はまだ、少しだけ遠い銃火の雄叫び

だが、それも少しだけ言葉を紡ぐ間にも迫りつつあり

「なら、俺達は俺達の出来る事を精一杯やるしかない。だから——伊隅中尉も伊隅中尉に出来る精一杯を」

「大佐が命じた……俺達の希望を必ず、將軍殿下様に届けてください」

「…………はい」

最早、諭すような言葉にやよいはポロポロと涙を零し、鼻声になり
そんな声音を必死に抑えて答える

男はやよいの様子に罰が悪そうに帽子を目深に被り

「三班！弾薬庫の準備は出来てるな？！」

「へい！班長」

「四班の動力室。七班はS－11側は？！」

「動力室及びシステムの繋がりもいけます！こっちの起動に本部の方も連動するように！」

「実験用なので、実践型には劣りますがこっちもいけます！」

「おーし。上出来だ……楠木！天野原！」

頭をいた後、やよいから視線を外して仲間達へと最終確認を飛ばし

そうして二人の少女を呼びつける。整備班内最年少の二人を

「班長！」

「お前らは中尉と一緒に騎士団へ行け」

「なっ？！そん——」

「うるせえ！！餓鬼がガタガタ抜かすじゃねえ！！二十歳にもな
ってやがらねえ…小娘が一丁前な事をほざこうとするな」

食い下がるように男の言葉に反論しようとするさやかであったが…
…一喝されて堰き止まる

「…………お前らはまだ、何にも知らねえ。世界がどうか、自分達の生きるって事の意味もくそも」

「卑怯だって、分かっちゃいるがよ……俺達を許すな。お前達みたいな餓鬼に戦いを、花の女学生を謳歌しなきゃなんねえ、お前達を——」

「泥だらけにして、油塗れにして、何にも……何にも、子供らしいこと一つも出来ないままに大人の世界に追いやって来ちまった。俺達を——」

其れは……本来の世界において、ある男が告げた言葉。ボロボロになった自分達の基地

多くの命と戦う術を失い。なおも、負けずに立ち上がり——名も明かされること無き若き戦士達を見送る為に紡がれた言葉

——旅立つ若者たちよ

——諸君に戦う術しか教えられなかった我等を許すな

——諸君を戦場に送り出す我等の無能を許すな

——願わくば、諸君の挺身が、若者を戦場に送る事無き世の礎とならん事を

二十歳にもならない。子供達。死地へと追いやるしかなかった男の嘆きのような語り

多かれ、少なかれ、大人達は思い続けていた

五十年。かの織田信長が詠った歌。“敦盛”

“人間五十年”人の命の儚さと愚かさを痛切に叩きつけるソレに似たモノ——否、正しく戦争

BETA大戦が始まり、はや五十年に届こうとする時が流れた。まさしく、人の半生と言っていい時間

ただ、ただ……生きるか死ぬかの瀬戸際を戦い続けることしか出来ない“この世界”に生まれた

罪無き命達。未来ある若者達が真っ先に死んでいくのが当たり前になってしまった世界

“ALTERNATIVE”——あいとゆうきのおとぎばなしの
子供達

「許すな。お前達は生きて、生きて……お前達みたいな子供達を生み出すな」

格納庫内に男の言葉が響く。誰も彼もが……手を止めて、男の言葉を飲み込み続ける

「戦う事を知らずに生きれるように、今、世界中の何処を探してもたった一つしかない世界の“希望”の元へ」

希望。黒の騎士団。奇跡を描き続ける為に生み出された存在

「行け。行って必ず、俺達の希望を形にしろ」

「……はい。はい！班長！！」

泣き崩れそうな顔のままに、涙声でさやかは頷く。力強く、焼き付けるように

この場にいる者達全てを――

「すみませんが伊隅中尉。二人を頼みます」

「はい。必ず、必ず届けます。貴方達の希望を大きな希望の元に」

照れくさそうな男の笑みを浮かべてやよいへと託す。涙ぐみながらにしっかりと頷き言葉を返すやよい

それに満足そうに頷き

「おら！お前ら、なに手を休めてやがる！さっさとやる事やりやがれ！！」

全員が己に注目しているのを気恥ずかしげに一喝した

局面は最終段階へと入る

「倒しても、倒しても……！増え続けるなんて、インチキよ！」

「嘆いても仕方が無い！ハイヴ内など、こんな感じだ！」

「ホント、最悪よね……！BETAって……！」

二丁の零零式突撃砲

36mm口径から放たれるは途切れる事のないマズルフラッシュとフルメタルジャケット弾が織り成す

弾薬の雨を只管に突破しようと足掻く。クノツヘン達

唯依とまりか以外にはこの機密格納庫付近には戦術機の姿はなく

さりとて、敵側たるアインスト達も主に集っている巖谷の“斑鳩”
と“白い牙”の“不知火”達へと

親の敵のように執拗に迫っている為、こちら側へと迫り来るクノツ
ヘン達の群は少ないながらも

「前が出る……！」

「支援15秒！唯依さん！それ以上は――」

「分かっている！だが、正面の圧力を霧散させなければ格納庫が危
ない！」

たった二機の戦術機では50以上は居るであろうクノツヘン達相手
には分が悪い

なおも……87式突撃砲と比べ格段の威力が上がっている零零式突撃砲

“XMO”による柔軟且つ三次元機動に対応した戦術機

唯依とまりか。共に“愚者”と潜りぬけた激戦に培われた技術

帝都にてまさに攻防を広げているゲミュートとは比べ物にならない脆弱な装甲……骨の身体

ソレらが合わさり――

「はあああ――！」

烈火の咆哮。どこかしら……巖谷に似た面持ちと振るわれる74式近接戦闘長刀の軌跡

腰だめに構えていた突撃砲を片手で構え直し、背部の跳躍ユニットに火を入れる

山吹の“武御雷”の脚部。剣術に於ける重要な位置を占める足捌きを重要視して

四爪。四方向へと伸びる足先を地から微かに放す。NOEの体勢で持つて

この動作、実に一秒以内に収めて突き進む。腰だめで支えていた、もう片方のマニピレーターに長刀を握らせる

点火した跳躍ユニット。腰元に装備されたスラスタを可変させ水平に持っていき

「せえええいいい！」

一息に飛び込む。長刀が跳びかかっている

骨と骨の継ぎ接ぎによって形作られるクノッヘンが呆気なく、唯依の一太刀によって裂かれる

たった二機のみ故に、殺到するように密集していたクノッヘンが纏めて三体屠られる

上段からの振り下ろしによって、二体。斬り下ろした長刀を跳ね上げて

“武御雷”に限りなく低い姿勢を取らせつつに跳ね上げる。刃を――巻き込まれて、更に一体が残骸に成り果て

「寄るな！化け物共！！」

跳ね上げた太刀の奥。突撃時に前方へと先行するように打ち放たれていた突撃砲

それが横脇にピッタリと張り付いているかのような銃身をクノッヘン達前に現れさせ

36mmを盛大に吐き出す。目前にて唯依の“武御雷”に集ろうとする骨共に

両脇から迫って来る者共には回避運動から得られる運動エネルギーを持った装甲の刃

ロシア軍機にも採用されている装甲そのものを武装としたカーボンブレード製装甲によって切り刻む

「唯依さん！」

「頼んだ！」

唯依の突撃と合わせて支援に徹していたまりかが声を上げ、両の零零式突撃砲及び背部の兵装担架に積まれている

予備の零零式突撃砲の二丁を起き上げて構える。120mm

「戻りなさい！！」

87式突撃砲と同じ36mmの真上に設置されている120mm口径モジュール

その四門から一斉に飛び出す。炸裂弾

立ち上げから10秒程度で、完璧に近い等間隔でもって放つ

着弾点から炸裂する範囲を均等に割り振り、他の着弾点の炸裂とギリギリ被せ合う形——理想的な面制圧攻撃

たった二機でありながらも、其の一撃と一撃により……押し込もうとしていたクノッヘン達

出先を封じ込め、彼女達が出撃したおりに発見した位置までのクノッヘン共を押し返す

「持ち耐えられそうだな……」

苦い顔で心にも思ってもない事を告げる唯依

「給弾出来る暇があったらね……！」

答えるまりかは切実に想う事を冗談交じりな声音で返す

先にも記した通りに、たった二機。戦術機二機。二機連携にして半小隊エレメント

ただ、二人だけではホンの少し過剰積載している弾倉も……リロードする暇などない

小隊にも満たない編成。絶え間なく攻め込んでくるアインスト

どれだけ二人が腕が立とうとも、武器弾薬が続かなければ戦場に立ち続けることなど不可能

突撃砲の弾薬が切れれば……もう、其の時点で敗北が確定する。彼女達の敗北条件――

「篁中尉！！ムリーヤが格納庫から出ます！護衛を！」

「ッ……！了解！」

ムリーヤの破壊。この基地から飛び立つ事が出来ないならば、それ

は唯依達の戦略的敗北に繋がるのだから

ゆっくりと格納庫から底部の三機の車輪を回して、旋回しつつにムリーヤの機影が這い出てくるのを

網膜投影の横合いから見つちに

「どれぐらいで飛べる?! やよい中尉!」

「ざっと、五分! 離陸の加速も含めて!」

コクピットへと問いかけ投じる。返ってきた言葉に

「五分…か…!」

「辛いね…! その大きさを二機ってのは…!」

更に顰め面を晒す。五分もの間、自分達とムリーヤを守り通す

現状、格納庫防衛でも精一杯であった二人。これに加えて鈍重でずんぐりとした輸送機すらも護らねばならないとなれば

苦い声音が洩れ出るのも仕方がない

各々の心情の辛さは相互で理解しつつに、唯依とまりかはひたすらに突撃砲を放ち続ける

機体をムリーヤ近くに寄せながらに――ムリーヤが出てきた途端に

「こいつ等…?! 明らかに?!」

「輸送機^{ムリーヤ}を狙ってる?! BETAに知性なんてないはずでしょう?!?!」

驚愕する。身体は染み付いてしまった闘争術によって、敵を駆逐する事に専念しているも

誰も彼もの思考を埋め尽くす——クノツヘン達の行動。遮二無二、ムリーヤ目掛けて突撃しだすという行動に

唯依たちの戦術機。“武御雷”であろうと“真改”であろうとおかまいなしに突っ込んでくる姿に

「そんな…?! タイプXに反応しているっていの?! 起動も、電力すらも通ってない未完成の戦術機を感知したの?!」

ムリーヤのコクピット内にて叫ぶやよいの言葉に

さらに二人の思考が迷走し出そうとするも——強大な爆発音が響く思考はソレによって中断する。戦術機の外部スピーカーで拾わなくとも装甲越しに聞こえる爆発音

「まさか……?!」

「コレって?! でも……!!」

機体が振動によって震える。あたかも……鋼鉄の巨人の輩が逝ってしまったのを悔やむかのように

「S-11。いや、装着している暇もなければ、此処にあるのは実験用の二機のみ……といことは」

下唇を？む。確認するかのように無意識に紡いでいた言葉を塞き止める為に唯依は

赤い液体が垂れるのも構わずに力強く

「……主機暴走。自爆攻撃……！」

バンザイアタック

目尻は険しく、されど瞳の中は悲しみと潤みに満ちた相貌でまりかは悔しげに言葉を洩らす

震源の大きさと、機体のさざめきぐらいからして――

「少なくとも……二機……！」

視線を、網膜投影に映る“武御雷”の視界を爆発音が発生した方向に向ける

盛大な爆炎。ともすれば……キノコ雲に似た形を取りそうなほどの爆煙

ソレらが二つ立ち上ると、時同じくして此方へと飛来してくる――

「無事か?! 唯依ちゃん! 伊隅中尉……！」

左腕前半部が根こそぎ奪われ、右腕の肩部ユニット。原型機たる“撃震”と同じ四角系のソレ

物の見事に弾き飛ばされたかのように内部機構を曝け出し、神業に等しき剣術を絶え間ない動作によって

急激に金属疲労を起こしたかのように嫌な音しかさせない脚部ユニット群。心無し、全体が歪んで見える

巖谷の“斑鳩”が唯依たちの目前へと跳躍してき

「「大佐!!」」

「よし。上出来だ二人共。良く踏ん張った」

データ・リンク越しに最初は険しい相貌。次いで、唯依達の声と通信越しに見える顔に微かに胸を撫で下ろす

「やよい中尉! 離陸まで残りは?!」

——二機を頼む

「残り…三分です!」

——…ッ……了解…!

音声の意思疎通とは別に…暗号通信を流用した文字通信を同時に送り

告げる。身勝手と、唯依達には取れてしまう言葉を告げる

「さあ、後は……私に任せなさい」

「「?!?!?!」」

告げられた言葉に度肝を抜かれ、そうして

「どういふ……?!?!動かない?!?!」

「ど、どうして?!?!何で動かないの?!?!」

二人の意志とは裏腹に期待はインストールされたプログラム通りに動く

ムリーヤの発進を邪魔しない程度に接近し、直衛となって両のマニユピレーターに突撃砲を二機とも同じように構えて

ひたすらに、後先考えずに物量で押すが如くに乱射し続ける。刻一刻と滑走路に乗るムリーヤを追いかけているが

「大佐?!?!いえ、叔父様?!?!どういう事ですか?!?!教えてください
!!叔父様!!」

「動いて!動いてよ!まだ、皆、中に居るんだよ?!?!お願い!動いて!」

互いに互いに同じように叫ぶ。己の意志に反して動き続ける“武御雷”と“真改”

今、一時のみ……意志を無視し続ける。冷たい鋼鉄の巨人と成り果て

「叔父様!!!!!!!!!!!!!!」

「……共に過ごせて良かったよ。たとえ……血の繋がりがなくても、唯依ちゃん——」

万感の思いを込める。穏やかな顔にて

身体はいまだ、戦士のままでも……今この時は、相貌ぐらいは——

「君は、^{アイツ}篁の娘で、俺のたった一人の娘だ」

父親になっても許されるだろう

「いや……いや！叔父様！！！」

零れるは想いと雫。今まで凜としていた相貌は……そんなモノはなかったと言わんばかりに崩れる

まるで……ユーチャリスにて“愚者”を押し倒したときのように弱々しげな姿のままに

「俺に育てられるのか……子育てなぞ、右も左も分からん俺に。あの篁は唯依ちゃん^{バカ}を置いて逝きやがってから」

相対的に巖谷は満足した姿。とても、満ち足りた表情で朗らかに言

葉を為す

瞳を閉じて、其処に映っているだろう風景と人を想い返して

「随分な時が経ったな……」

吐露する

「や……お……」

「何をすりゃいいのか。何を教えばいいのか。最初はソレばっか頭を過ぎっていたが……」

「存外に、物事は単純だった。家に帰れば、幼い唯依ちゃんが居て、あどけない笑顔で俺を出迎えてくれた」

遠い、遠い思い出の果てから歩き出す

「アイツを亡くして、俺より唯依ちゃんの方がよっぽど辛いつてのに……俺に迷惑をかけないようにって、な」

「……め……じ……」

「だから、俺は誓った。あのバカが心配で化けて出ないように――」

頭を振る。情けなさそうにいい年した中年が浮かべるのは恥なのか
もしれないが

「無理して作った笑顔なんかじゃなくて、心の底から、いつか――」

」

今ぐらいは許されるべきだ

再度、頭を振る。今度は諦めたようであり、成し遂げたような曖昧なままに

「さあ、行きなさい。希望の元へ、明日を求める者の元へ」

脳裏に浮かぶ。言葉と姿

最後まで、正体分らず仕舞いであれど……

——「未来を望む者」

力強く答えた

——「力の源は心にある。我らの心はただ一つ」

手を胸にあてながら、底に宿る思いを確かめながらに

——「進むべき道は険しいが、だからこそ明日という日は我らにある」

だからこそ——

「幸せになりなさい」

「やめてええええええ！！！！叔父様あつああああ！！！！」

飛び立つ。希望の箱舟。大切な“娘”が旅立つ。仲間達と共に

親鳥の元を巣立つ雛鳥たちを見送る

主機のリミッター解除

爆発的に振り切っていくメーター群

頻りに鼓膜を鳴り立てる警報

「……済まん。箕。約束は守れそうにない」

瞳を閉じる。瞼の裏に焼きついた友へと問いかけるようにして告げて

開けた先に……一人の男が居た

片手に酒を抱えて、男臭い笑みを、しょうがない奴めという表情で見据える男の姿を

巖谷は――

「ふっ、なんだ。せっかちなおい？肴は用意できなかったぞ？唯依ちゃんの花嫁姿は」

鼻を鳴らして、一瞥をくれる男

「代わりと言っちゃあなんだがよ……あの子の気になる奴の話をしてやろう」

顰め面になる男

「なんだ？何処の父親も、娘の相手の話は聞きたくねえってか」

分かってんなら言うんじゃないとけつたいな面を見せる

「俺だって、経験した事だ。お前も経験しとけ。すこぶる不機嫌になれる事、請け合いだぞ？」

知るかボケ

「こっちが言いたいぐらいだ！！」

互いに不貞腐れて――

不意に男が巖谷に手を伸ばす

片手にもつ酒瓶を揺らしながらに

ただ、巖谷は瞳を閉じて、満足げに其の手を取った――

西暦2001年 11月11日 未明

帝国軍技術廠……消滅

“伝説”はその字の如く^{あやな}に伝説となった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8754r/>

ダイバー 第二部 青年の“あいとゆうきのおとぎばなし”

2011年12月22日05時02分発行